

史 跡

上之國勝山館跡 XII

——平成2年度発掘調査整備事業概報——



1991・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之國勝山館跡 XII

—平成2年度発掘調査整備事業概報—

1991・3

上ノ国町教育委員会

序

国指定史跡上之國勝山館跡の環境整備事業は昭和54年に着手以来、今年で12年目を経過いたしました。

この間遺構確認調査の進捗に伴い、当初予想をはるかに超える膨大な量、かつ大規模な遺構遺物等が検出され、勝山館は北海道の代表的な館跡として広く認識されるに至っておりますが、尚この史跡にみられる歴史の痕跡を総体的に解明されるべき問題が山積しております。

文化庁記念物課の諸先生を始め、昭和63年度より勝山館跡調査研究専門員としてお願い申し上げている神奈川大学教授 網野善彦先生、東京大学教授 石井進先生、京都大学教授 朝尾直弘先生、東北学院大学教授 榎森進先生、山形大学教授 仲野浩先生には御多忙中にもかかわらず多大の御指導を賜りましたことを衷心より御礼申し上げます次第です。

勝山館跡環境整備事業は上ノ国町が進める「北海道中世の丘」建設構想の核としても重要な位置付けをされております。

これらのまちづくり構想諸事業とも連携させながら、本事業の継続推進を期するものであります。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方の一層の御指導、御助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成3年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 和 泉 定 夫

本文目次

序	
本文目次	
例言	
I 調査の概要	1
II 遺構の確認調査	1
1 調査目的	1
2 検出遺構と出土遺物	1
1 空壕跡の調査	1
(1)位置・概要	4
(2)層序	4
(3)空壕跡	4
(4)橋跡・溝跡・柱跡	4
(5)空壕跡上部小柱穴列	9
(6)空壕B及び東第一平坦面	9
(7)出土遺物	9
2 第二平坦面の調査	24
(1)位置・概要	24
(2)層序	24
(3)溝跡	24
(4)建物跡	33
(5)その他の遺構	45
(6)出土遺物	45
III 小括	50
1 前年度迄の調査	50
2 本年度の調査結果	51
(1)空壕跡周辺	51
(2)橋列跡周辺	52
(3)建物跡	52
(4)遺物	52
IV 保存処理	56
1 鉄製品	56
2 木製品	56
V まとめ	60

第6図 空壕A覆土出土遺物②	11
第7図 空壕A覆土出土遺物③	14
第8図 空壕A覆土出土遺物④	15
第9図 空壕A覆土出土遺物⑤	17
第10図 空壕A覆土出土遺物⑥	19
第11図 空壕A覆土出土遺物⑦	20
第12図 空壕跡A上部柱穴列配置図	21
第13図 空壕B覆土他出土遺物	23
第14図 第二平坦面調査区土層堆積図	25
第15図 第二平坦面建物跡配置想定図	27
第16図 第1号建物跡・第38号竪穴想定図	29
第17図 第2号建物跡想定図	31
第18図 第2号建物跡鉄鍋埋設図	34
第19図 第3号・第4号建物跡想定図	35
第20図 第5号建物跡想定図	37
第21図 第6号建物跡想定図	39
第22図 第二平坦面建物跡出土遺物①	41
第23図 第二平坦面建物跡出土遺物②	42
第24図 第二平坦面建物跡出土遺物③	43
第25図 第二平坦面建物跡出土遺物④	44
第26図 木製品・重量変化・収縮率グラフ	58
第27図 木製品・重量変化・収縮率グラフ	59
附図1 空壕跡周辺遺構配置図	
附図2 第二平坦面遺構配置図	

表目次

表1 出土遺物観察表 陶磁器	46
表2 出土遺物観察表 金属製品・木製品	47
表3 出土遺物観察表 木製品	48
表4 出土遺物観察表 木製品・骨角器他	49
表5 出土遺物観察表 骨角器・石製品他	50
表6 陶磁器集計表	53
表7 木質遺物集計表	54
表8 金属製品・鍛冶関連遺物集計表	54
表9 骨角製品・石製品他集計表	55

挿図目次

第1図 遺跡地形図・調査区位置図	2
第2図 調査区範囲図	3
第3図 空壕跡土層堆積図	5
第4図 橋柱跡想定図	7
第5図 空壕A覆土出土遺物①	10

写真図版目次

PL. 1 第二平坦面建物跡全景	
PL. 2 遺構検出状況	
PL. 3 空壕跡土層堆積状況	
PL. 4 遺跡調査状況	
PL. 5 遺構検出状況	

- PL. 6 遺物出土状況・出土陶磁器
- PL. 7 出土陶磁器
- PL. 8 出土陶磁器
- PL. 9 調査地点近・遠景
- PL. 10 空塚跡調査状況
- PL. 11 空塚跡調査状況
- PL. 12 空塚跡調査状況（橋柱跡）
- PL. 13 空塚跡遺物出土状況（木製品他）
- PL. 14 空塚跡遺物出土状況
- PL. 15 空塚跡遺物出土状況
- PL. 16 空塚跡遺物出土状況
- PL. 17 空塚跡遺物出土状況
- PL. 18 第二平坦面遺構検出状況
- PL. 19 第二平坦面遺構検出状況
- PL. 20 第二平坦面遺構検出状況
- PL. 21 第二平坦面遺構検出状況
- PL. 22 第二平坦面遺構検出状況
- PL. 23 第二平坦面調査状況他
- PL. 24 出土遺物（陶磁器—PL 7-1 内面、鉄製品）
- PL. 25 出土遺物（銅製品・るつぼ、木製品）
- PL. 26 出土遺物（木製品）
- PL. 27 出土遺物（木製品、繊維他）
- PL. 28 出土遺物（木製品）
- PL. 29 出土遺物（獣骨他）

例 言

1. 本書は史跡上之国勝山館跡の平成2年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。
2. 環境整備工事については上ノ国町文化財保護審議会特別委員をお願いしている北海道大学足達富士夫先生、建築遺構の調査検討には同じく文化学院 鈴木亘先生、歴史的考察等については同じく、山形大学 仲野浩先生、東北学院大学 榎森進先生、東京大学 石井進先生、神奈川大学短期大学部 網野善彦先生、京都大学 朝尾直弘先生から御指導を賜った。
3. 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。

調査主体者 上ノ国町教育委員会

教育長 和泉定夫

指導 上ノ国町文化財保護審議会特別委員

北海道大学教授 足達富士夫、文化学院講師

鈴木亘

勝山館調査研究専門員 山形大学教授 仲野

浩、東北学院大学教授 榎森進、東京大学

教授 石井進、神奈川大学短期大学部教授

網野善彦、京都大学教授 朝尾直弘

主管 上ノ国町教育委員会文化課 課長 関

登志夫

修景技術専門員 山崎重任（上ノ国町建設課

長）

発掘担当者 学芸員 松崎水穂

調査員 学芸員 斉藤邦典

4. 本書の作成は松崎、斉藤が協議の上松崎が行なった。

本書の執筆はⅠ・遺物観察・集計表を作業員山崎洋子、Ⅳを斉藤、他を松崎の分担で行なった。

5. 挿図の作成は調査員の指示に従い作業員が行なった。挿図中の北方位は真北を示す。

6. 土層の土色については「新版標準土色帖」（農林水産技術会議事務局）を用い遺物の色調名については、「標準色彩図表A」（日本色研事業株式会社）により目測で比定した。

7. 調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜った。（順不同）

文化庁記念物課 田中哲雄 加藤允彦 服部英雄 美術工芸課 田辺征夫、北海道教育庁文化課 木村尚俊 調査班 森田知忠 松山教育局 牧野義則、本村幸生、東京大学 宇田川洋、東京都立大学 峰岸純夫、富山大学 前川要、京都芸術短期大学 内田俊秀、中央学院大学 市村高男、東洋文庫 渡辺兼庸、国立歴史民俗博物館 吉岡康糖 福田豊彦 小野正敏 小島道裕 千田嘉博、北海道開拓記念館 小林幸雄、八戸市立博物館 佐々木浩一、浪岡町歴史資料館 工藤清泰、北海道埋蔵文化財センター 大沼忠春 種市幸生 三浦征人、福島県文化センター 飯村均、鯉ヶ沢町教育委員会 富田浩、川内町教育委員会 富岡一郎、中里町教育委員会 斉藤淳、浪岡町教育委員会 木村浩一、松前町教育委員会 久保泰、乙部町教育委員会 森広樹、中村五郎 高岡徹 北海道・東北史研究会

作業員

表ミキ子 加賀鈴子 笠谷奈智子 川合冨子 竹内江美子 出村喜作 中里則子 西村よね子 沼沢国枝 八田揚子 細川キヨ子 松本清 南谷澄子 森恵美子 山崎洋子 鷺田フミ子

I 調査の概要

勝山館の主体部は三段の平坦面から形成されている。中央を御代参道が東西に走り、後方頂部には鯉神八幡宮跡がある。

過去2カ年は第二平坦面の端部とその直下の調査を実施した。63年度には道を挟んで南側部分、平成元年度には北側部分を調査した結果、第一平坦面の奥・第二平坦面直下に断面V字形の塚が二重に切られていることが明らかとなった。

本年度の調査は残されていた中央部分の塚跡及び直上部分の1200㎡について実施した。

調査は5月9日～12月11日まで行った。調査方法は従来通り20m×20mの大グリッドを分割した4m×4mの小グリッド方式とした。又昨年同様柱穴配置略図1/80を作成し柱穴間の重複、覆土の状態を観察しながら柱穴を掘り下げた。尚焼土等は半裁しセクション図作成後掘り下げ、土壌のサンプリングを行った。遺物取上げは、I、II層は4m×4mのグリッドを4分割して2m×2m毎の一括取り上げ方式とし遺構面であるIII層は実測図を作成後レベルを附して取り上げた。実測は遺物取上げは縮尺1/20の平板実測、遺構面実測は1/10、

1/20その他による平板及び遺り方測量とした。

5月9日発掘調査事業開始

作業内容、就業規則その他説明、調査区史跡地内踏査、関連出土品等の説明。

5、6月 第二平坦面17K11～14グリッドラインより平坦面奥16K13～15J12、塚直上まで遺構確認作業を行ない柱穴及びそれに伴う溝10、土壌5、旧道跡を確認した。

7～10月 第一平坦面の空塚Aとした内側の塚は幅8m×深さ2.5m、外側の空塚Bはそれぞれ4m×1.8m程ある。空塚Aより調査開始、各グリッドの掘り下げが進むにつれIII'A層からは多数の小柱穴を確認する。遺物はIII'Bの1～6に多くとくに下位に進む程に鉄、木製品、陶磁器と大量の出土をみた。Aとも写真撮影、層位実測、層位転写を行った。

10月、11月 第一、二平坦面遺構確認作業。第二平坦面の精査では38号竪穴を確認掘り上げ、溝1～22、土壌1～8までの検出と調査確認、写真撮影。11月15日より第一平坦面から実測開始12月9日実測、レベル作業終了。実測終了後埋戻し作業も併行して行ない12月11日に終了した。

II 遺構確認調査

1 調査目的

昭和63年度、平成元年度の遺構確認調査の結果、第二平坦面の肩に楯列が巡り、直下に二重の空塚の切られていることが判明した。しかしなお二重の空塚相互の関係、塚を渡る施設、通路、楯列の規模等、不明のところが残された。

平成2年度はこれらの解明を図るべく両年度の調査区に挟まれた中央部分1200㎡の調査を実施した。

2. 検出遺構と出土遺物

1 空塚跡の調査

(1) 位置・概要

館主体部の中央を通る自然研究路（旧御代参道路→参道）は、第一平坦面の最奥から第二平坦面

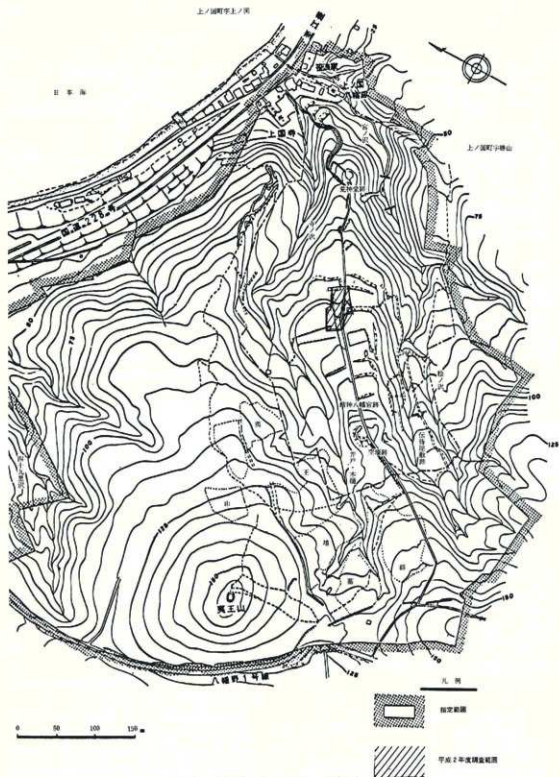
へ上り坂となって続いている。ここは自然研究路として整備される前は緩いS字状を呈していた（PL-9）ようである。この道の左右、南北方向に二重の空塚跡が63、元年度の調査で検出されたことは既述したところである。

調査の結果、この二重の塚跡は屈曲を持ちながら道路下部を通り左右連続するものであることが判った。

中央部分は少くとも内側のAと仮称する空塚を渡る橋が架けられていたと推される。

塚は館の後半期まで若干の堆積を底部に見ながら機能していたようである。

終末期、塚が埋った時期に橋のあった位置周辺に小柱穴列が並び、橋とは別の横断施設が設けられたようである。



第1图 遺跡地形図・調査区位置図

外側の空壕(B)の東側平坦面は、調査途中となりBを渡る施設も含め未解決のまま残された。

(2) 層序

空壕A・B及びその周辺の形成を推すべく、空壕Aを縦断、Aを横断、Bを縦横断して土層堆積状況を観察し、第3図とした。なお、空壕A北西斜面の横断とBの横断土層図は省略した。(PL.3.11)。又溝1の横断、2の縦横断図も作成したが充分整理することができなかった。

本遺跡に於ては、渡島大島噴出起源と推される白色火山灰(Os-a,1741年)層を含む第II層を鍵層とし、それより下位のIII層をほぼ陥形成期の整地層、III層(イ〜と表記)をその遺構覆土として扱えているところである。

空壕Aの土層の堆積は、主として第二平坦面寄りの北西斜面からの流入であることが第3図(上)から看取される。その下半にIII'Bとした黒褐色を呈する土層が堆積している。中層のIII'B5層を中心に木製品等、有機質の遺物や陶磁器などが大量に出土した。III'B5層やその下位III'B6層にはグライ化が顕著である。これらの土層は軟らかなシルト質をベースに基盤礫の細粒が薄く互層をなす層であり壕底での自然堆積を示すようである。又この層は両前年度調査区である左右壕底には堆積を見ない層のようである。

III'A層は、溝ロ・ロ、溝ハ・ハの覆土層面によってA₁とA₂に2分されるがその成分等は殆んど差がない。A₂層上面での遺構等も検出できなかった。溝2の掘り込みの下底は第3図(下)から基盤を掘り下げた位置にあることが知れる。このことから、溝1・2は空壕Aの掘り下げ当初から、構築されていたと推するものである。

なお溝ロ・ハ(ロハ)については昭和63年度調査でも同様の堆積を見、流水跡等を推したが、それとの対比等はできなかった。

III'A層上面で幾つかの小柱穴が穿たれている。これは少なくとも空壕Aが埋没して、機能を果さなくなった時点で遺構であり後述及び第12図にみるように壕を渡る橋のほぼ上部に位置することから、埋没時での類似施設を示すと推される。

空壕Bの土層の堆積は、中央部ではIII層の堆積は厚い(第3図A'-A'、PL.3-3-11-4)が沢寄りの方は堆積が薄く(第3図C-C'、PL.3-4)なっている(本概報IX、X、XI)。この中央部のIII層の

厚い堆積は空壕Aにおける小柱穴遺構形成時に対応するものであろうか。

(3) 空壕跡

第二平坦面の端部は自然研究路の左右で、前方への張り出しが屈曲を呈している。両前年度の調査でこの平坦面直下に空壕Aが見つかり、Bがこれにほぼ平行していたところから、その中央接点の左右の延長線上に求め難いところとなり、壕の喰い違いや土構等も調査開始時には予測したところであった。

調査の結果、空壕Aは16J1付近で北へ大きく屈曲し、第二平坦面のそれに平行して、元年度検出の壕に連続することが明らかとなった。又BもAに平行している。壕底は調査区南端から徐々に下降し、屈曲部付近が最も低くなって、ほぼ水平に調査区北端に至り、前年度調査区から徐々に低くなり、寺ノ沢へ切り落とされる。空壕Bの壕底は、調査区中央、15J11区付近が最も低く、降水時には20~30cmの深さで水が貯まる。壕底までの深さは、空壕Aでは後述橋跡と推した中央部線上(第12図DD')で4.6m、2.2m、又その巾は10.6mである。空壕Bの深さは、中央部分では1.9m、巾は4.2m、調査区北、15K3区内では巾1.4mと最も狭くなり(付図1)、深さも70cm程となっている。

(4) 橋跡・溝跡・柱跡

a 橋跡

調査区中央、現自然研究路の北に空壕Aを跨いで2個一対をなす柱穴がいくつか検出された。1、2対対応関係が不明で前後関係は釧路も見られるが橋柱跡と推される。柱穴は空壕A西斜面に3~5対、東肩に2、斜面に1対?がみられる。巾8尺、長さ35尺(水平距離)、6.5尺×32.5尺(間)が想定される。各々斜距離33尺、角度12~13°、7~8°程である。(第4、12図、附図1)。柱穴はいずれも基盤の軟質岩盤層に穿たれたものである。東斜面肩の柱穴内には、下に石をかませ水平に支石がすえられたものがある。(第4図、PL.12)

この柱穴で推される橋は壕西斜面の方に長く斜めに上っているが、壕底を中央に壕東肩の柱穴掘り込み面とほぼ同じ高さの西斜面の柱穴までの間を水平に架け渡し、壕西肩まで階段状に上っていることも推されるところである。

b 溝跡

壕西斜面の橋柱跡の両脇に岩盤を深く掘り込め

た溝状の遺構がある。層序の項でも述べたが北寄りの溝の基底には空壕埋没時の覆土が堆積し、上半は後出の覆土が堆積する。これは溝の形成が壕のそれと同時に行為れ、壕中央が埋没していく中でも溝の機能が必要であるため掻き出し等による維持が図られていた(単に流水路の跡とも考えられるが溝として残存していたことは同じであろう)と推されることである。

c 柱穴

壕西斜面南側の溝跡直下に2個、壕を越えた反対斜面上に1個の柱穴がある(附図1)。16J7区の柱穴1個は新出であるが他の二つの柱穴は63年度調査時に検出のものである。63年度の遺構図との調整をすることができなかったが、63年度概報で1間×3間の壕に跨がる遺構としたものの延長とも考えられるものであり、1間×4間の遺構になることも考えられる。

(5) 空壕跡上部小柱穴列

空壕跡覆土の除去作業中、III'A層の上面で直径5~8cm程の小柱穴が多数検出された。一、二底まで掘りあげたが30~50cm程で空壕底までは達していなかった(第3図)。また掘り方を検出できず、断面も底が鋭角をなすことから、打ち込み状の柱列の跡と推される。柱穴位置と確認面のレベルを平板で記録し壕底まで覆土を掘り下げるといふ、粗い作業を行った為、充分にその配置状況を把握することができなかった。第12図上で想定したA~C、E~Hの7列には長短が認められ、又ラインを形成しない柱穴のあること等はこうした調査精度に起因するものであって本来C或はF列などのように空壕跡を横断する二列一対として機能したかと推するところである。例えばAE、BE、CF、CG、EH、が想定されることでありその柱間は各、9、6.5、8.5、9.2、8.3尺を測ることができると推される。

(6) 空壕B及び東第一平坦面

前年度の発掘調査区内で空壕Bを渡る橋跡と推される三対6個の柱穴等を検出している。この為、空壕Aを渡る橋跡とした柱穴軸線上に空壕Bを渡る施設があるかどうかは重要事項の一つであった。空壕Bを越えた東の第一平坦面にはその軸線上に道路跡とも推し得る凹みか検出された。が空壕Bの直近に橋等の施設を明瞭に示す柱穴を認めることはできなかった。又上述の凹みについ

ても層序の分析等を行うことができなかった。前年度検出の橋跡についても橋にいたる道筋は第一平坦面の調査が中途の為充分明らかにできなかったが、この凹みの性格についてもその東方向の連続部分、空壕東第一平坦面等が今年度は未調査のままとなったことが重なり、結論を得ることはできないところとなった。他日を期さなければならぬ。

(7) 出土遺物

空壕覆土及びその東平坦面から各種の遺物が出土した。巻末に遺物の集計表と図示した遺物についての観察表を付した。まだ充分な分析ができていないが一、二主要な遺物について次に記すことにする。

a 陶磁器

前年度第二平坦面及び関連部分の調査で志野唐津等の優品がまとまって出土し、染付の中にも今まで殆んど出土を見なかった文様構成が見られ、館の終末期を知る資料として留意した。

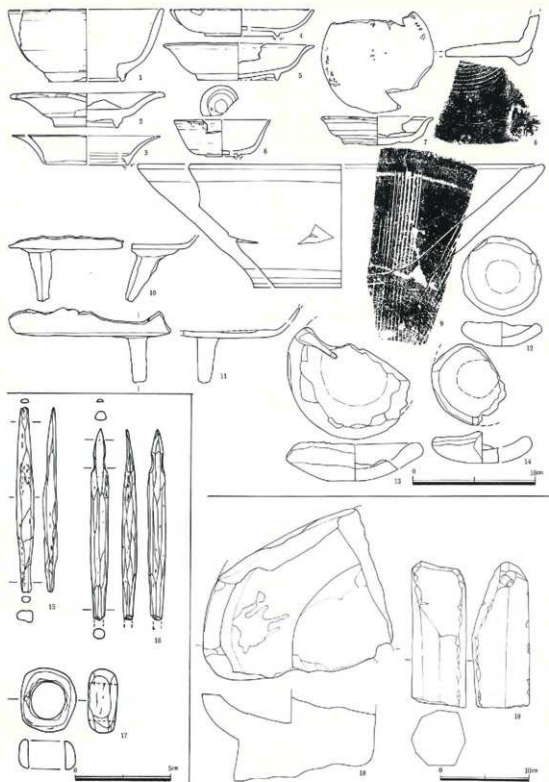
空壕Bと東平坦面で口縁下に雷文帯を有する青磁碗が出土した。空壕B覆土のものは内面に型押しして人物の描かれる人形手とされるものである。(PL.6-8,9左中央)。15~16世紀の遺跡で出土が良く知られていながらも勝山館では今まで出土しなかったものである。

空壕Aの覆土中からは1,800点余が出土している。数値は総て破片数であるが、第二平坦面出土遺物と接合したものはいずれも含まれていない。

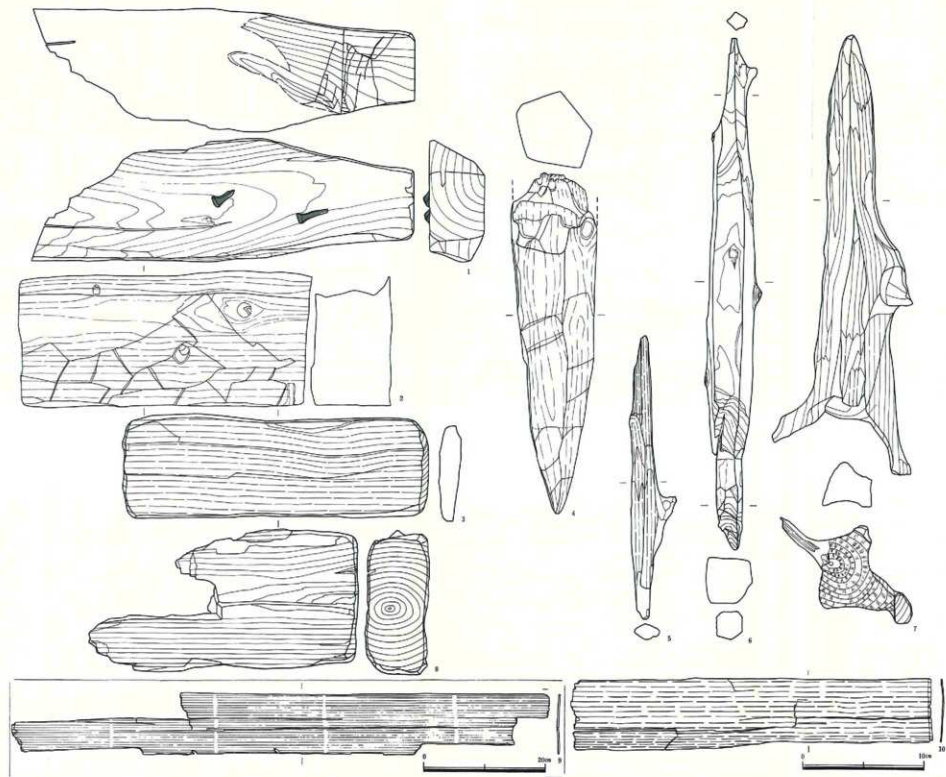
層序の項でIII'B層とした黒色土を主とする壕底の層中から特色のある染付の一群が出土した。ごけ底で内面に花鳥文や捻花を描くもの(PL7-2,3)である。更に溝2の覆土及び底面近くからも同じ捻花の皿と端反りで内面に(変形)十字花文を描く皿が出土した。(PL8-4,5)。

これらに属する皿の一部は香掛城で天文17年(1548)~永祿3年(1560)の層から出土し³⁾、根米寺の天正13年(1585)焼土層下⁴⁾、堺では同年銘木簡に伴出し⁵⁾、清洲城下朝日西遺跡では文祿2年(1593)、慶長3・4年(1598-99)の紀年銘資料に伴う⁶⁾など16世紀後半の遺跡に出土例が多く知られるようである。

従ってこれらの染付の一群から空壕の存続下限を確定することは無理ではあるが、16世紀後半を想定することはできよう。又、溝2の出土遺物か



第5図 空壕A覆土出土遺物①



第6図 空堀A覆土出土遺物②(アミは釘)

ら、層序の項で触れた溝の埋没と空壕の埋没の間の時間差もそれ程長くないと推される。基盤礫やロームブロックを大量に含むⅢ'A層の堆積は比較的短期間と推され、層厚からは人為的な埋め戻しとも考えられるところとなる。

なお、空壕覆土出土陶磁器中の志野、唐津類の位置については両前年度出土遺物の層位等も合せ、今少し検討することにしたい。

b 木製品等

空壕A覆土下半のⅢ'B層を中心に木製品等有機質の遺物が大量に出土した(表2-4)。

下駄は数種の物が見られるが陰翳の差歯はないようである。

曲物や折敷の大小は用途差を示すのであろう。表で箱とした第9図4は幾分外側に彎曲しており、箱膳のフタ等を推している。箸と推されるもの1,400点余のうちに完形のものか208点あった。長さ21.9cm径5.6cm重量4.8g程の平均値である。両端を削り出した粗末な作りであるが第10図4・5の2本はかなり丁寧なつくりのものとすることができ。

ヘラとしたものの中には羽子板状のもの(第8図1,2)がある。柄と板の間が一いきに挟れた単純な作りのものである。柄は手なれて滑らかであり、2には握った跡が残る。板面は両者とも片面に切痕が残る。1の先端は切痕の残る面側の稜の摩耗が著しい。ヘラとして使用したものであろう。8の大形のもの、7、10にも握りの痕跡が残されておりヘラ、棒、杖等としての使用であろう。

杭状のもの角柱状のものなどを建築部材とした。杭としたものの大部分は20cm未満の小さな、薄手で必ずしも建築部材と特定できたものではない。第6図9のような長い物は屋根葺き材かと推している。

武器として一括したものの中には矢柄(第7図9-11)弓(同8、10図6)鉄?と鞘の類を含めた。厳密には狩猟、漁撈具、加工具に細分することが必要である。

矢柄は中央がやや太く、箭付近はやや平らにつくられる。先端はいずれも欠失しており不明である。矢羽を縛った跡は見られない。

弓としたものは一本、素木のものである。弦をかけた跡はない。

鏃としたものは外観状、鉄、骨角製に類似した

ものである(第7図1-7)。1はやや反り気味のもので先端は鋭利である。4は鉄片面に凹みがある。毒を入れるところであろうか。5、7の先端が平らなものもある。1-4、6は或いは刺突の機能を有するかと推する。少くとも1は十分に機能する。5図16の骨角器と殆んど同じものと考えられる。5、7は、やや形態が異なるがアイヌの漁撈具に木製の魚を射る例がある。これらは木製の形代としての出土例もあり、実用品かどうか断定し兼ねるものである。

鞘の類は小刀(マキリ)用のものが大部分である。桜皮で包まれた12、13は、矢筒の一部かとも推すが、やや薄身のようにも、或いは鈍の類の鞘であろうか。

人形代は下位の丸棒部分に摩耗があり、手なれの跡と推される。下位の丸味は差し立てた様子を示すものであろうか。ただ出土状況は俯せ横倒しの状態で周辺にも人為的な形跡は認められない(PL.6-5)。第5図の瀬戸、美濃の碗が直近で出土していることから16世紀の所産とすることはできる。なお、位置的には橋の下位部分である。他に削り出し、挟りが上部にあって頸部状に作るものかいくつかあるが、用途は不明である。

又8図4、5などは或る種の形物と思われるが不明である。

木筒状のものは肉眼では墨書等を見ることはできない。

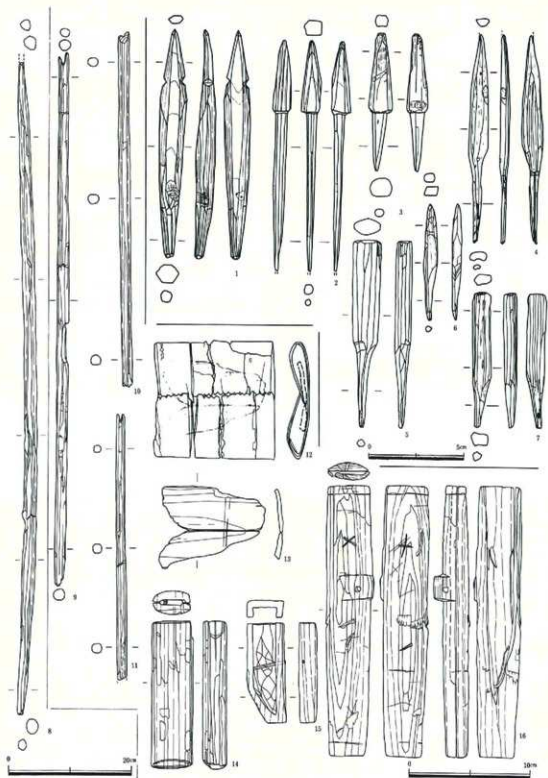
剥ぎ取った木の皮を束にしたもの、縄に燃したものの、組み上げたもの及びバラの繊維(皮)、桜・樟皮等が出土している。束ねたもの、バラのものは保存していたものであり、縄等の使用目的は不明である。表中、加工木、箸素材としたものの中に15cm前後と寸足らずのものがかなりある。捨木等も含まれるかとは推されるが定かではない。

第8図3はたも網の杵²¹、同図8は網杵²²、又10図14は扇子の骨²³と推している。

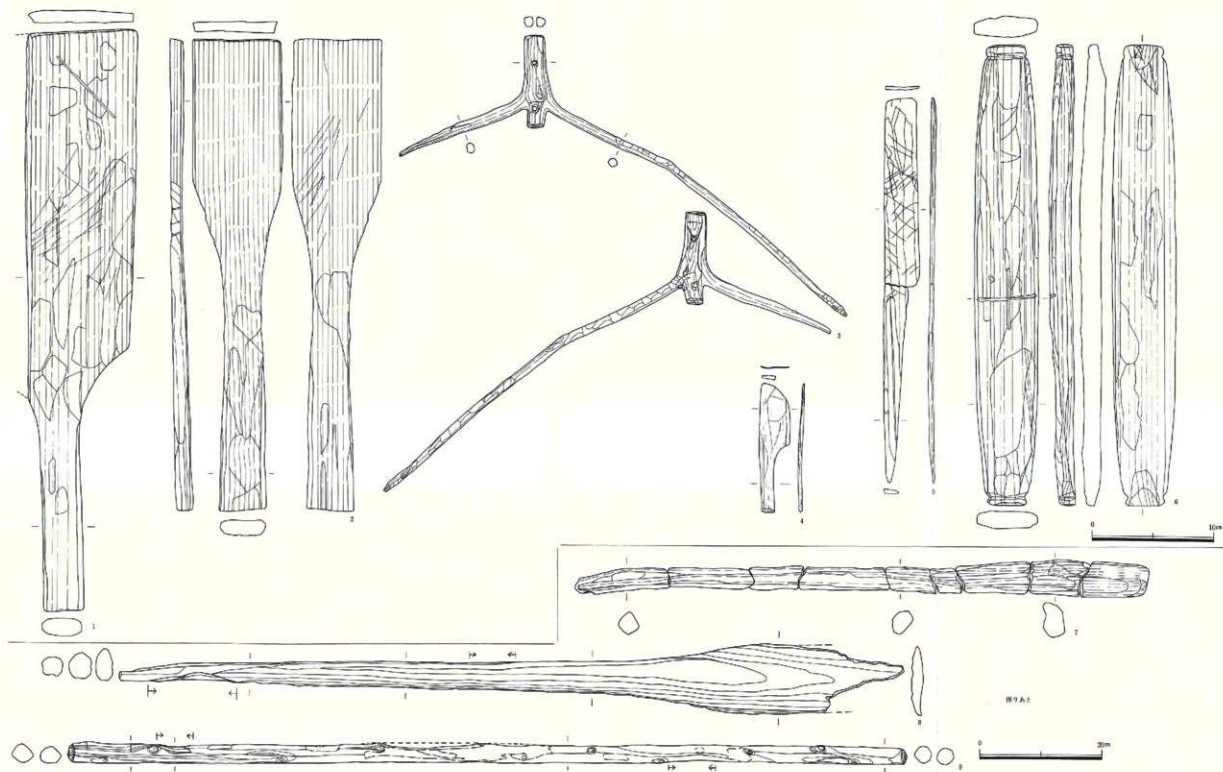
漆器類は碗、皿、杯等である。10図25は杓子の皿で溝状の部分は柄穴であろう。

c その他の遺物

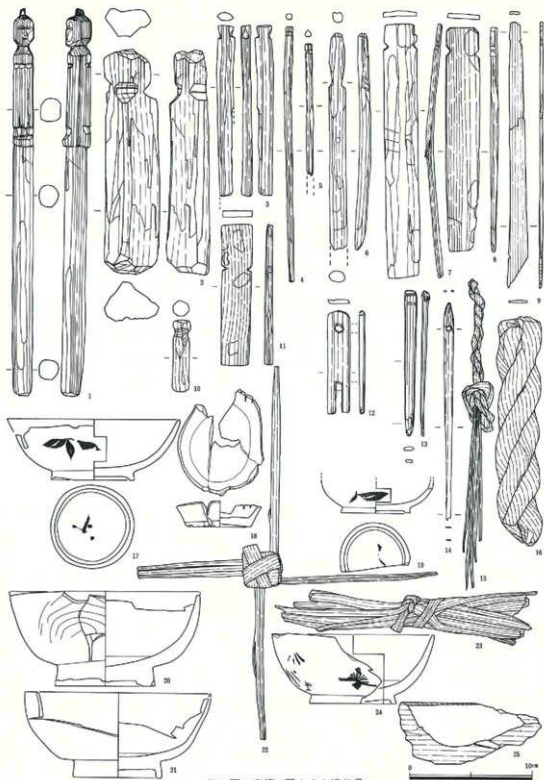
第5図12-14は陶製の埴輪である。12は3点中唯一の完形品で最も小さい。内面に溶融物が付着する。中央部は皮膜状、周辺部は発泡して固着し口唇にまで溢れている。口唇の一部は熱を受けてひび割れ、剥落し、底面も又細い亀裂、剥落が見



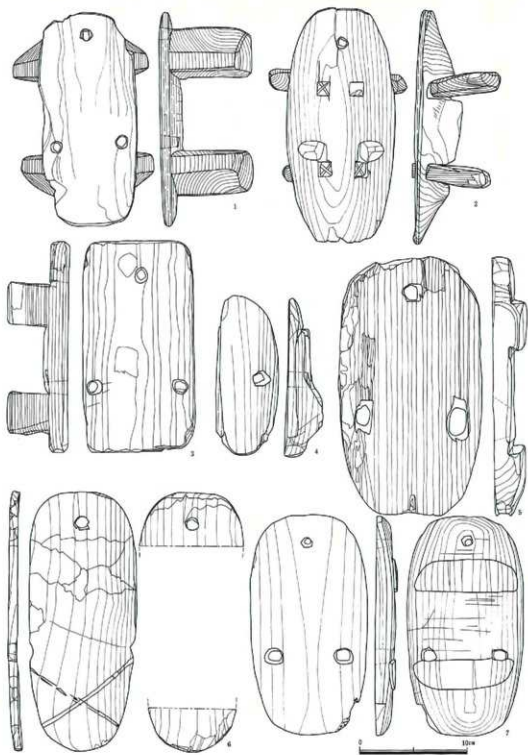
第7図 空壕A覆土出土遺物③



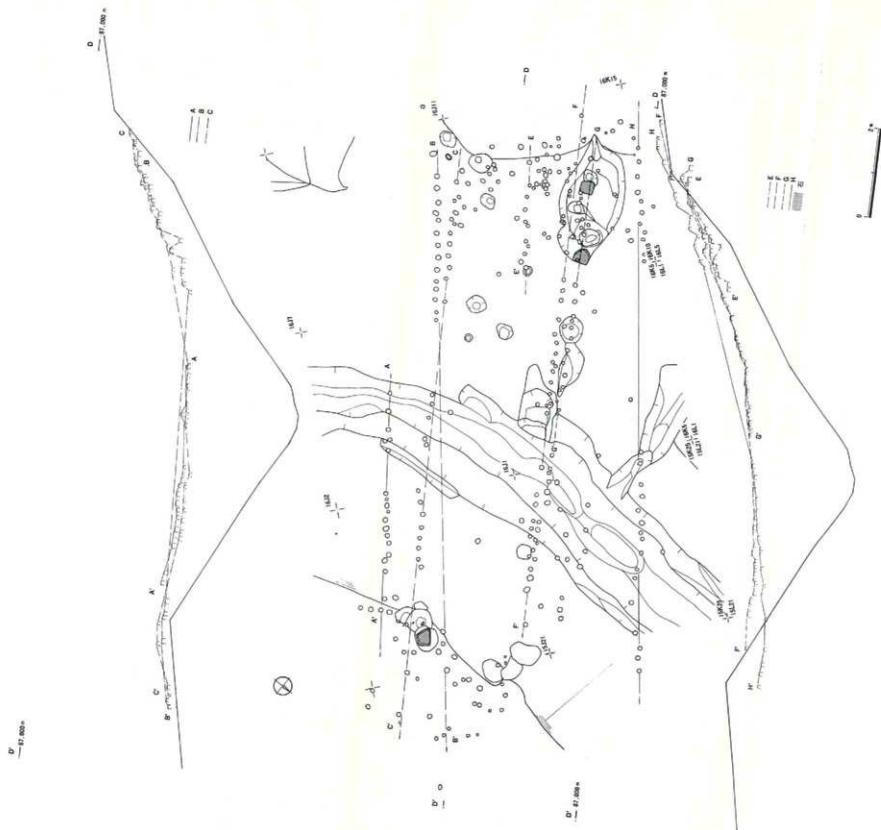
第8圖 空壕A層土出土遺物④



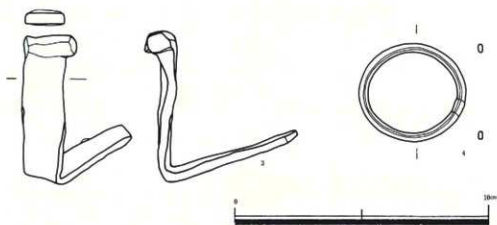
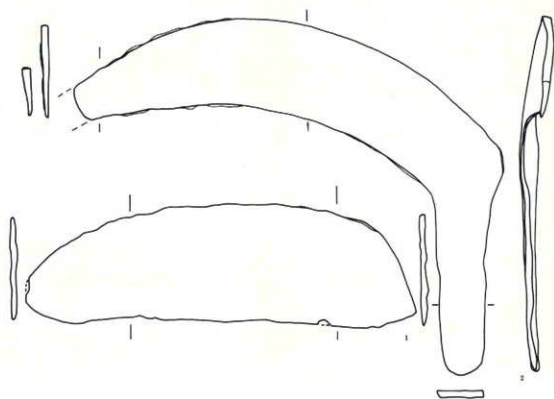
第10圖 空塚A覆土出土遺物⑥



第11図 空塚A層土出土遺物⑦



第12図 空堀跡A上部柱穴列配置図



第13回 空堀B覆土他出土遺物

られる。溶融物に緑、赤等の発色が見られる。胎土に小石、砂、禾本科の植物を含む。14は12より一回り大きめのもので、内面に一部発泡した溶融物が残っている。内側器面には加熱による亀裂がみられ、破断面観察からは器体の半分近くまで発泡しているのがわかる。胎土に小石、砂粒、径2mm弱の禾本科の植物を含む。底面に亀裂があるが肌は良く残っている。植物質の圧痕状の線がある。13は最も大きなものである。一部に段状の凹みがあり、注口部を想わせる。内面から口唇まで全面溶融物が発泡して固着する。器体内部まで熱が通って発泡、空隙が見られ、底面は荒れて砂質化している。いずれも銅の溶融（鋳造）に使用したものと推される。

- 註1 香掛城跡出土の「天文十七」年(1548) 銘木簡と伴出遺物 松原隆治 貿易陶磁研究 No.6, 1986
- 2 根来寺防院跡における焼土遺物とその組成 村田弘 貿易陶磁研究 No.8, 1988
- 3 堺環濠都市遺跡出土の天正13年銘木簡及び共伴遺物 北野俊明 野田芳正 貿易陶磁研究 No.4, 1984
- 4 朝日西遺跡出土の「文祿三年」「慶長三、四年」紀年銘資料 遠藤文文 小澤一弘 貿易陶磁研究 No.6, 1986
- 5 三浦征人氏からご教示を頂戴した。
- 6 宇田川洋氏からご教示を頂戴した。

2. 第二平坦面の調査

(1) 位置、概要

自然研究路を第一平坦面から第二平坦面へ上った左右(南、北)の第二平坦面端部は昭和63年、平成元年度に発掘調査が行われた。その結果、複数の溝状の櫛列と付属施設と推される柱穴等が検出されている。

空堀跡の発掘調査によって、橋跡が検出され、それに到る通路の位置、通路と櫛列の取り合い、更には第二平坦面入口の途断と内部の構成等が次の追求課題となった。

調査の結果、現自然研究路の下位に幾分位置を移しながら東西に通る道路跡、側溝が複数見つかった。櫛列と通路との取り合いは通路北側は後世の大きな溝による擾乱の為、又、南側は調査未了の為明らかにすることができなかった。通路に

沿った北側の平坦地では、溝で区画された地割面に掘立柱と竪穴の建物跡を検出した。掘立柱の建物跡にはこれまでの検出遺構に比べると大形のしっかりしたものも見られた。

(2) 層序

中央の自然研究路と左右の平坦地の関係、平坦地内の遺構の形成等を把握べく土層断面を観察し、第14図とした。又個々の遺構等については確認した時点で適宜観察を行った。

本遺構の基本的な土層の堆積には前述の如く、耕作土である第I層、渡島大島を噴出起源とする白色火山灰(Os-a, 1741年)層を含む第II層、その下位に見られる盛土、整地の館の形成期と推される第III層、以下に軟い黄褐色の火山灰起源と推する層と黒褐色土層のIV層、縄文時代の包含層であるV層等が見られる。

(3) 溝跡

調査区内で数条の溝跡を検出した。これらは近世以降の所産のものや館形成期の二者がある。前者には自然研究路側溝である昭和のものや幕末～明治期の畑の区画溝及び道路、流路があり、後者は通路側溝、建物敷地区画溝、櫛列である。

a 近世以降の溝

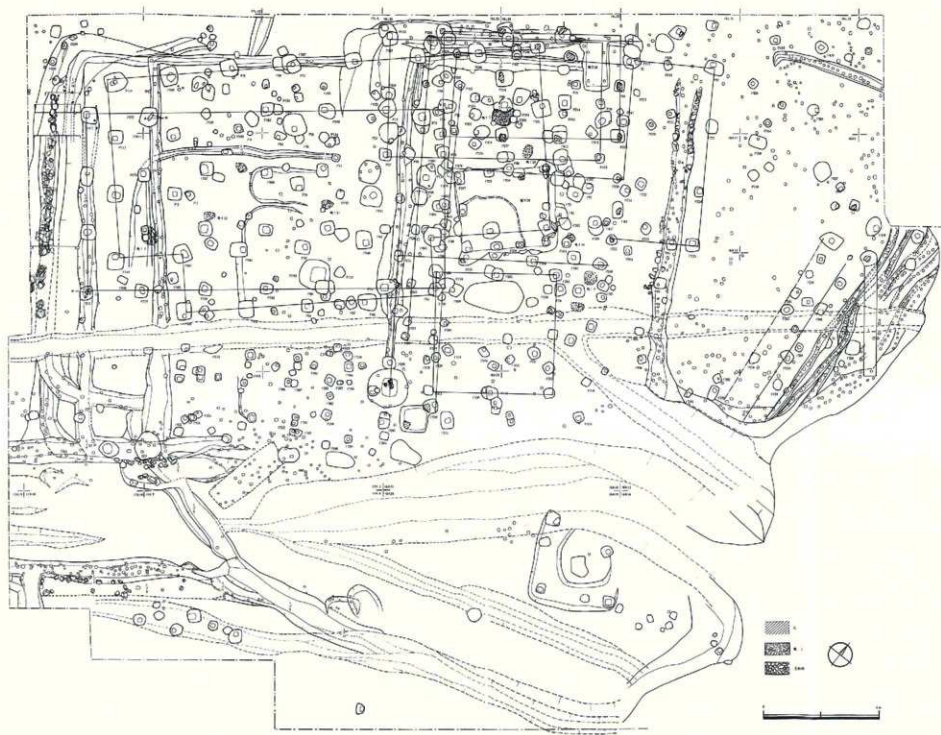
溝13・14：自然研究路の側溝である。17K4区で溝3の南肩を少し削り9区で一度消失し19区へいたる。溝14は17K5区付近で下位の溝9・11と重複する(14図中、15図)。

溝1：第II層を切って作られた(14図)溝。北側に溝と併行する50cm程の土層状の段はこの掘り上げ土で築かれている(14図)。畑地の境界等を示す土堤の築成に伴うものであろう。16K17区で南東に向う溝2が分岐するが両者は同一時期のものとして推される(15図)。

溝3：第II層中に掘り込み面を持つ溝である。15K14区ではII層上半が溝底に堆積する(14図中)。幕末～明治以降の陶磁器が溝底から出土する。自然研究路設置以前の写真(PL-9)にある旧道の蛇行状態からは、幕末以降の通路底とも推される。但し明瞭な道路面は扱えていない。又溝中の大形の柱跡は同写真にある勝山館標柱の跡であろう。

b 旧道側溝

溝4・7、5・8：勝山館主体部の中央を通る通路両側の側溝である。4・7の南壁は石が積まれて補強さ



第15圖 第二平面建設配置想定圖

れているが、これは5、8の溝と重複して設けられた為である。8については上面観察で確認したにすぎない(14図上15図)。

c 建物跡地割関連の溝

溝15:調査区東、櫛列に近く南北に走る。両壁一部を石積とする。断面箱型で中に小柱穴が不規則にみられる。南は溝2で削られている。北端は開口して検出されたが詳細は不明。東から延びる櫛列状の溝と、第二平地面肩の櫛列で不整四辺形の空間を作り出している。

溝22:調査区中央付近にあって平地面を東西に二分する南北方向の溝である。北端等一部で二重になっており作りかえがあったと推される。断面U字形で小柱穴が散見される。P57、70等より古い溝である。東へ折れ20、21へ連ると推されるが詳細は不明である。

溝12:溝22の西から西進し溝10と交差して南進する。5cmと浅いU字状で東西方向に検出されたが南北方向ではやや巾広の溝となる。一部しか追求できなかったが、更に南して溝6の下位の溝に連るかを推す。溝10より古い溝である。

溝10:調査区西半で南北方向に走る。浅いU字形で小柱穴が散在する。北は東へ折れて連るが細く深くなる。南は溝6へ連続すると推される。館の通路面を横断することになるが、通路形成以前の地割の存在を示すかと推される。

溝17:溝10の西にある浅いU字状の溝で小柱穴が散在する。南は溝4に連ると推されるが北は不明である。溝の西壁は60cm程高い盛土の段へと連続する。段の上は浅い溝状を呈し、石が配される。石を除去すると溝19と柱穴列となるが、一部の調査のこともあり、溝17と石列が同時期なのか、それ以前の溝19と柱穴列が溝17と同時期なのかは確定できなかった。尚、段の上に連る西側はそのまま一段高い平地面が形成されており、別な建物の地割が続くと推される。

溝18:溝17に伴う盛土の段と溝19を除去した下に検出される溝。一部しか検出していないが、細めのU字形の断面を持つ。東へ折れて溝10の東西溝に重合すると推される。なお南は溝4を越えて5に連続するかも推すが定かではない。

d 櫛列跡

調査区の北東、第二平地面端部に溝の中に小柱穴の立ち並ぶ櫛列跡が7~8条検出された。溝の

上巾20cm、深さ50cm程、柱穴は径8cm、深さ60cm打ち込みかと推される。柱穴間の間隔は密である。これらの櫛列跡は前後関係を持ち、造りかえが行われている(15図)。土層の堆積からは内側の櫛列(14図中右)が新しいと看取される。

(4) 建物跡

検出された建物跡は獨立柱の建物跡、竪穴、その他である。

a 溝22北東地割内の建物跡。

第38号竪穴・第1号建物跡(第16図):第38号竪穴は、長軸をやや北寄りに持つ2.817×2.484m、深さ cm、柱間は2×3間で各4尺1寸、3尺1寸を測り、幾分桁行の長い方形となる。周溝、張り出し等はない。今迄検出の竪穴の中では最大で最も深いものである。床面は岩盤に達しているが、一部縄文前期の袋状竪穴と重複する(第16図破線)。末完掘の為詳細は不明である。柱穴の3箇所には建て替えがみられる。壁の下位が一部缺れて基盤の消失している部位があるが対応関係等は認められず、人為的なものと断定するにいたらなかった。覆土中から、片切り彫りの青磁蓮弁文碗、同線描きの碗、桜花皿、白磁切り高台と推される皿、端反り皿、厚手碗、染付端反り獅子皿、瀬戸・美濃端反り皿が出土しているが大部分は小片である。白磁碗は周辺から出土する口縁端反り、厚手の砂が付着する断面丸味のある三角形の高台を持つ大振りの碗(PL7-9右列中央)と同一個体又は同様の器形のものであろう。

第1号建物跡は38号竪穴の北東に位置する。2×3間の間で柱穴内に支石を据えるものが多い、北隣の柱穴は39号竪穴で消失していると推する。梁行5.7尺等間、桁行6.6尺等間となる。

第2号建物跡:22号溝に軸線を同じくする2間×3間の建物跡である。6.4尺等間の柱間で南半2間×2間の1室に鉄鍋を埋設した炉を伴うと想定した。AA'、GG'、HH'、イイ'、ハハ'、ニニ'等は建物の周りを囲む、塚状のものかと推すが柱穴がしっかりしてかつ四間に亘って厳重なことなど、他に比べるとやや異質であり、断定し兼ねるところである。なお鉄鍋は18図及びPL.5-4に見るように抜きとられることなく放置された他の建物の柱穴で破壊されている(25図5)。

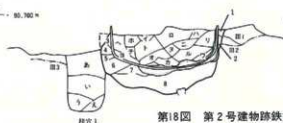
第3・4号建物跡:溝22を南西に1間を越えて検出された3号とそれに軸線を同じくする4号



16K1	16K2
16L20	16L25



A 約 700 m



第18図 第2号建物跡鉄埋設図

0 50m

である。溝22の西角で一部確認された溝がこれらを図するものと推される。

3号建物跡は2×3間、6.5尺等間で北東桁方向に4.2尺の庇が着くと推される。2×2間と1×2間に区切られる。

4号建物跡は3号の南東にある2×2間6.5尺等間の建物である。3号と4号は39号竪穴と重複する柱穴を介して一棟となることも推されたが南西側に対応する柱穴を見出し得ないため、2棟として想定した。II'はこれらを図する場状のものとして推されるが溝を伴うかどうかは確認できなかった。

b 溝17、18北東の建物跡

第5号建物跡：溝18で画された地割内に位置する。溝の頂で述べたように溝18は溝17の画する地割南西の段を形成する盛土の下位に位置する為、西隅の一部しか確認していない。(第20図実線部分)。このため詳細は不明であるが、南東へ延び溝5へと至るか推測している。溝18の南西は一段高い平場を切り下げて段差をつくり出している。

建物跡は3間×6間で6.5尺等間の柱間寸法を有している。北に2×2間の一室を見るが、南側も17K6の焼土1と重複している柱穴Aは浅く小

- Ⅰ-1. 10YR4/4焼、赤褐色、炭化物、焼土粒、粘土、中や中、ハード
- 2. 10YR4/4焼、10YR4/4、赤褐色、炭、ハード
- 3. 10YR3/4焼、暗紅、炭化物、ハード

柱穴

- Ⅰ. 10YR2/4暗赤、赤褐色、ロームブロック、炭化物、骨少量(5YR2/4暗赤、炭性)ややハード
- Ⅱ. 10YR2/3暗赤、暗紅、炭化物、炭、ソフト
- Ⅲ. 10YR4/3、4、黄、赤、炭化物、焼土粒、火山灰少量、ややハード
- Ⅳ. 10YR4/4、5、4、1.1の黄赤、暗紅、ややハード

遺構内盛土

- Ⅰ. 7.5YR4/6焼、炭化物少量、ソフト
- Ⅱ. 5YR2/9暗赤、火山灰、炭化物、骨(10YR3/4暗赤、炭性少量)ソフト
- Ⅲ. 全層、火山灰、焼土粒、少量
- Ⅳ. 5YR2/9暗赤、炭化物、少量、骨、1.1、火山灰、ソフト
- Ⅴ. 7.5YR4/4焼、炭化物、焼土粒、少量
- Ⅵ. 7.5YR4/3焼、炭化物、火山灰、少量(7.5YR4/焼土粒5m~2m)
- Ⅶ. 7.5YR4/3焼、赤褐色、炭化物、火山灰、少量、焼土粒
- Ⅷ. 7.5YR4/4焼、炭化物、少量、炭性、ややハード
- Ⅸ. 7.5YR4/4焼、炭化物、火山灰、焼土粒、少量、ソフト
- Ⅹ. 7.5YR4/4焼、炭化物、炭性、ややハード
- Ⅺ. 7.5YR4/4焼、炭化物、焼土粒、ロームブロック、ややハード
- Ⅻ. 7.5YR4/4焼、炭化物、焼土粒、ロームブロック、ややソフト
- Ⅼ. 10YR3/3暗赤、炭化物、ロームブロック、少量、骨
- Ⅽ. 10YR3/3暗赤、炭化物、火山灰、少量、混った土
- Ⅾ. 7.5YR4/3焼、炭化物、火山灰、焼土粒、少量、ソフト
- Ⅿ. 7.5YR4/4焼、骨、炭化物

備考

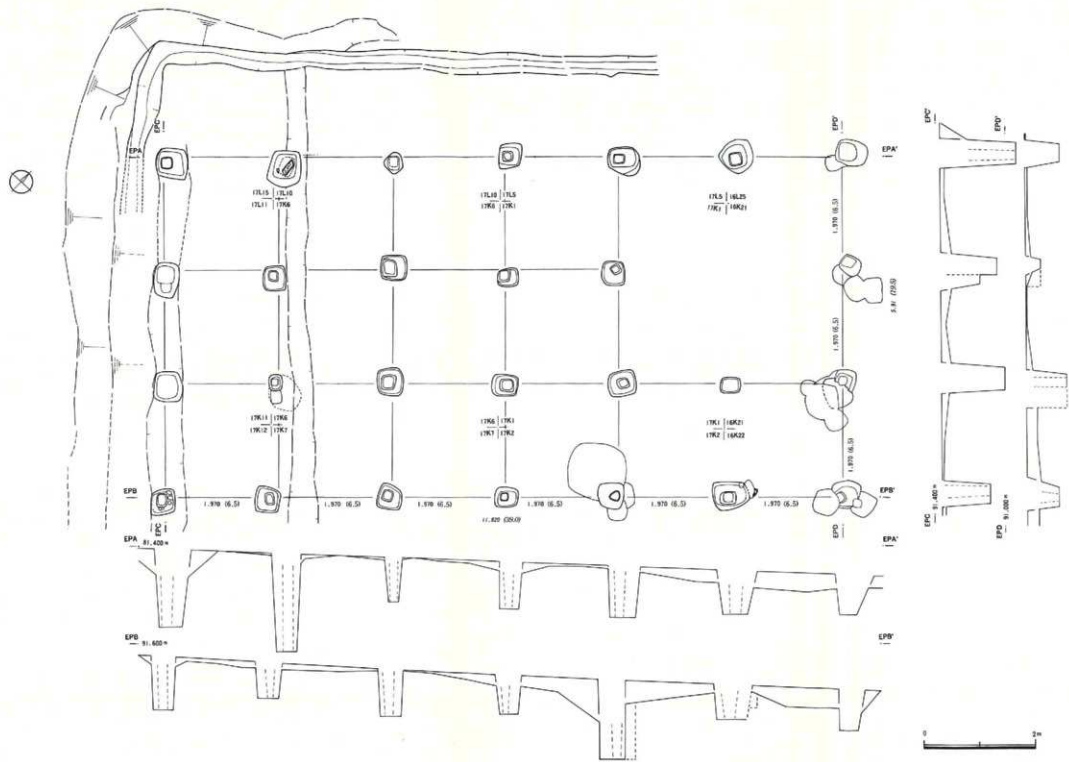
- 1. 10YR4/4焼、赤褐色、炭化物、焼土粒、炭、ハード
- 2. 10YR3/4暗赤、炭化物、焼土粒、少量、ソフト
- 3. 10YR3/4暗赤、炭化物、焼土粒、ソフト
- 4. 10YR3/4暗赤、炭化物、炭性、炭、ハード
- 5. 10YR2/4暗赤、赤、炭化物、少量、ソフト
- 6. 10YR4/4、4/6焼、赤褐色、骨
- 7. 10YR4/6焼、炭性
- 8. 7.5YR4/4暗赤、暗紅、ソフト

さいの床東か、或いは焼土1を優先させて、2×2間の一室と想定すべきかと思うところである。溝5までを地割空間とした場合南東面に空間が広がり、そこには5号建物跡とした柱穴群に比べ小さく浅い柱穴が見られ、建物長軸に平行する単独の柱穴列を不規則な柱間ながら想定できるが、建物跡とは認めなかった。建物前面の塼等があったものと推される。尚柱穴172の底面から礎板?が出土した(第6図3)。

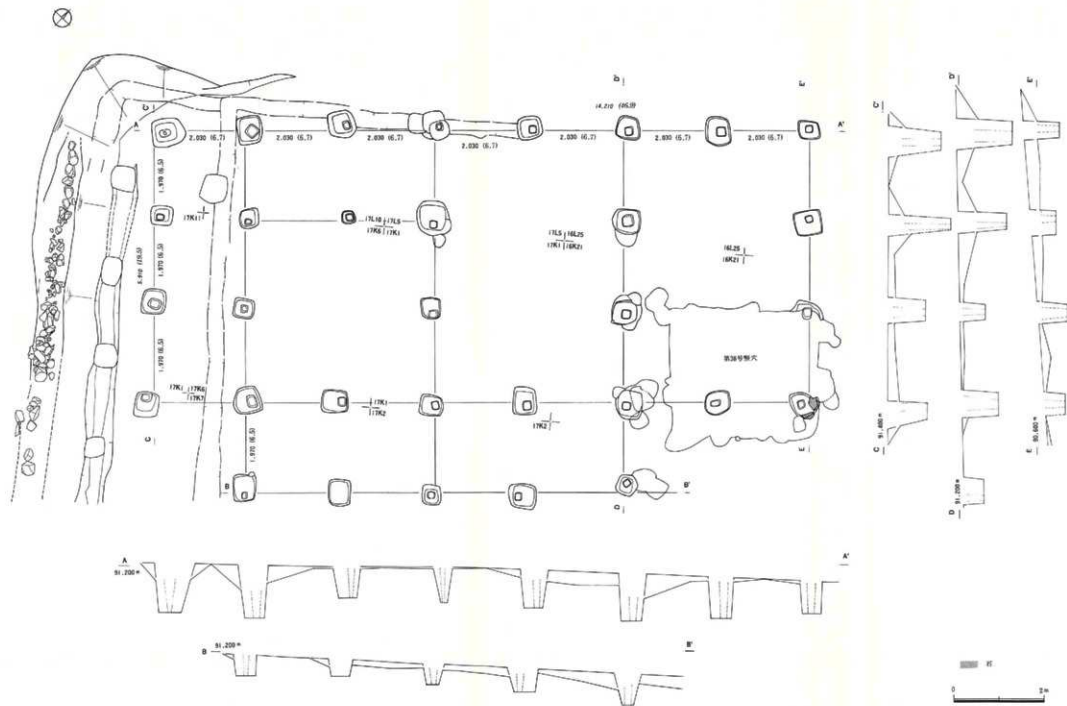
第6号建物跡：溝18を埋めてつくられる盛土の段と溝17で画される地割面に位置する建物跡である。溝17の南東端は溝4に合流すると推される。

建物跡は第5号建物跡と同様に地割内の北西に片寄って検出されている。3間×7間で南東に1×4間の庇が着く建物である。東(北東)の角1×2間は欠失しているようである。B'を延長させ土壌による柱穴の消失を想定してE'の延長線に柱穴を求め得ないが、21図とした。同図に図示はしていないが柱穴180南東の焼土が伴うとも推される(第15図)。2×3間三室の主屋に東と西に庇が着いた建物とも推される。

溝4或いは中央通路と建物の間の空間は第5号



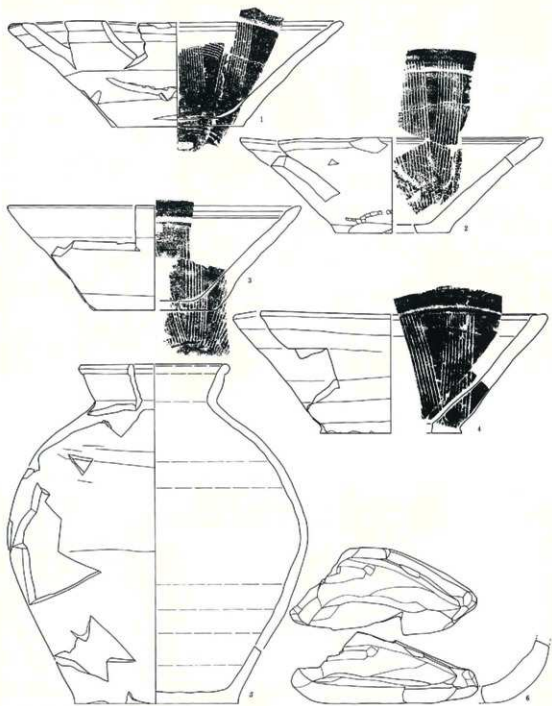
第20图 第5号建物跡想定图



第21图 第6号建筑物设想图

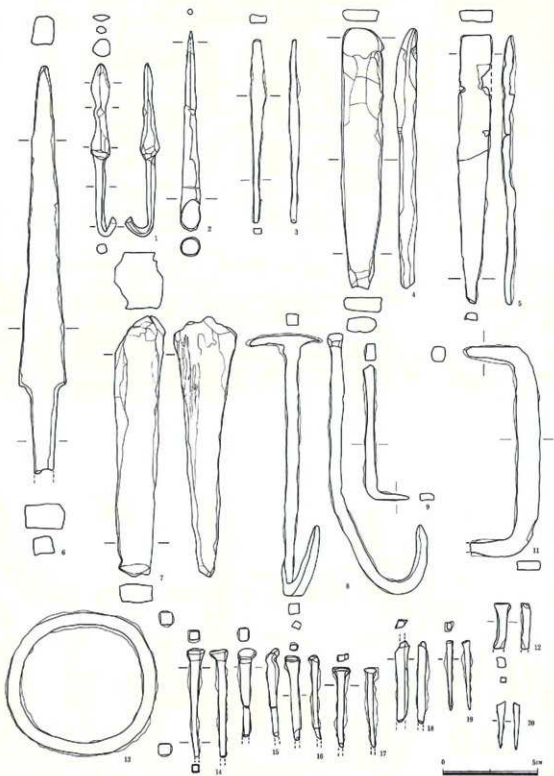


第22图 第二平坦面建物跡出土遺物①

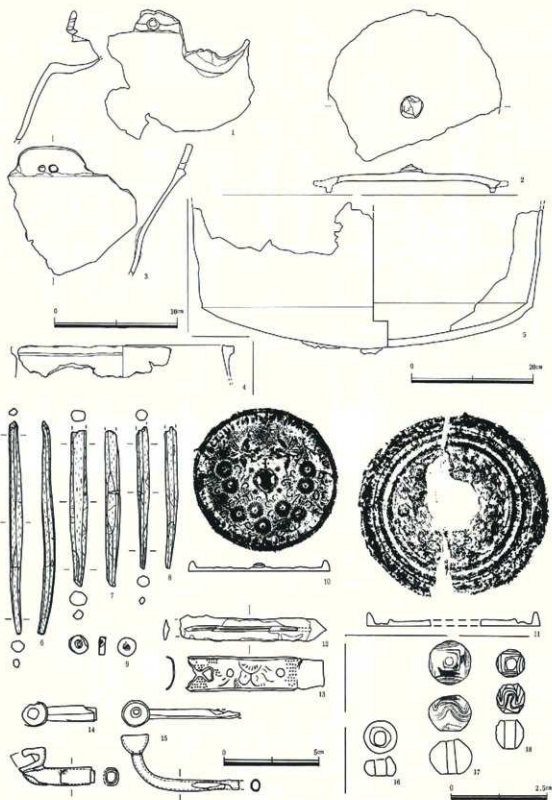


第23圖 第二平坦面建物跡出土遺物②





第24圖 第二平坦面建物跡出土遺物③



第25図 第二平垣面建物跡出土遺物④

建物の跡と同様と考えられるが明瞭な遺構は把握できなかった。

尚、第5、第6号建物跡が立地する地割の北東を画する溝15は遅くとも5号、6号建物跡の成立時には、存在するものと推されるが、建物跡と溝15の軸線からは、第2号建物跡の成立時に遡るかとも推される。この場合柱穴225-252、同243-92という溝15に跨がる遺構はないものとしなければならない。

(5) その他の遺構

a 溝15北東の平場、櫓

調査区北東端、第二平坦面の屑に作られる櫓列とそれから西にのびる櫓列状の溝と溝15で画される不定形な四辺形の空間がある。南北最大12m、東西約8mの広がりを持つが、まとまった建物跡を認めることができなかった。櫓列の内側に櫓列に平行して柱穴が検出されているが、余地は空地を形成するようである。

櫓列に平行する柱穴列は、櫓列と一体となって形成する桧敷状の遺構の造りかえかと推したが、鈴木亘先生から平行する柱穴列をもってする細長い櫓とすべきであろうとのご教示を頂戴した。

b 旧道跡東、土坑状遺構

調査区南に溝4、溝7を側溝とする巾3.2m程の旧道跡が見つかった。およそ10尺巾の道路とすることができる。北東方向に8m程迄は溝の位置や小柱穴列から推測できるがその先は幕末以降の溝や自然遊歩道などの攪乱を受け確認できない。

この旧道跡の中心線の北東方向への延長線と空壕を渡る橋柱跡の中心線の南西方向への延長とが交差する地点付近に1辺が2.8m、深さ75cmと推されるL字形の掘り込みが認められた。北側は幕末の溝によって削りさらされており良くわからないが、岩盤を垂直に掘り下げた方形の遺構であったかと思われる。中央部分が高く残されており、溝状のものであったのかも知れない。この方形の遺構の内部には壁に沿って柱穴が見つかった。

又南北の櫓列の延長線もほぼこの遺構付近に達している。

旧道跡の延長線上に位置しており、第二平坦面の入り口部分にあって、第一平坦面と第二平坦面を区分し、更には遮断する機能を有する施設の一部かと推されるものである(PL.22)。

(6) 出土遺物

出土遺物は陶磁器、鉄、銅製品、石、土製品、

ガラス玉、骨角器、木製品などである。これらについては、別に集計表、観察表を付して概略をまとめた。

これらの各出土遺物の出土地区、遺構との対比作業はまだ充分でなく先述の遺構の形成年代や前後関係、遺構の性格、機能等の解明は今後に残されている。

a 陶磁器

38号堅穴出土遺物に関連しては述べたところでもあるが、青磁片切形の連弁文碗、端反無文碗、白磁面取りの杯、挟り入り高台の丸皿、染付端反り口縁碗など、従前勝山館形成の初期或いは一部それ以前と推している遺物が散見されている。

これとは別に伏焼き(口売け)の白磁碗と推される小片(PL7-9上段から4番目)や口縁端反りで畳付き砂の付着するしっかりした断面三角形の高台がつき、見込み近くに段なし凹縁のつくくと推される大振りの白磁碗(同-右2列目中央)や中国製の鉄軸(天目茶)碗(PL.8-6左下隅、他に2片が空壕覆土及び空壕北第一平坦面出土-PL.7-4上段中央-右列上から2番目)などが勝山館内で初めて出土している。

尚、灰釉皿のうち高台径が一周り大きく、器体の厚いPL.8-8左上や盤(同-右中央)なども勝山館では出土の少ない瀬戸の製品であろう。

その他の器種では、瀬戸・美濃の茶入や徳利、香炉が出土している。

第22図14は越前、19は珠洲の摺鉢であり、勝山館跡では古手に属するものである。

b 鉄・銅製品他

第24図6は槍先の形状を示すが刃部等の形成はみられない。24図3は箆の一種、4は壺、7は櫛かと推している。

25図1は注口付きの吊耳の鍋である。3は口縁が段状に肥厚する容器である。鉢、壺の類であろうか。5の鍋は埋設して炉に使用されていたもの(第18図)である。一文字の湯口を持ち、現存の口縁帯や体部は銅による接ぎ補修が行われている。

5の鏡は柱穴内からの出土(PL.23-3)である。鏡面が斜めに立ち、握り挙大の石が一緒にあった。埋設かどうかは不明である。

八双金物は金箔押しのものである。

骨角器は二次加熱を受け変形している。

駒、玉類は単独の出土であり詳細は不明である。

石製の漁網鎌は初出である。

表1

出土遺物観察表 | 陶磁器

地区名	出土地点	種別器種	法量 mm			釉調	特徴	備考	図版 番号
			口径	底径	器高				
第二平塚面	15K24H	白磁皿	100	80	34	黄みの白	端反り口縁、受付高台中間部位まで露胎露付砂付着		22-1
"	15K19H	込付皿	99	38	27.5	"	幕間底・外面外面芭蕉葉文内面草文		" 3
"	16 K 11	"	106	31	33.5	黄みのグレイ	"、" 露胎下芭蕉葉文内面草文	ミソ15	" 4
"	16 K 22	瀬戸美濃灰釉碗	126	48	65	グレイみの黄	外面口縁下に1cm位の幅で露胎がのびる淡緑色釉が露付にたま	土坑1	" 5
"	16 K 24	青磁皿	120	41	28	グレイみのオリーブ	桜花裏、外面露胎以下露胎内面口縁下露胎、見込露胎	ミソ3	" 6
"	16 J 1 III	白磁皿	89	41	27	あかみオリーブのグレイ	持ちのある切高台、見込み重ね焼成あり		" 7
"	16 K 16	瀬戸美濃灰釉皿	113	54	25	うすい黄	端反り口縁、高台割出不明瞭丸座状露胎以下露胎	P282	" 8
"	17 K 6 I	込付皿	120	44	31	黄みの白	幕間底、外面無文見込に魚文、受付全体にスス付着、一部に砂付着		" 9
"	17 K 7 I	瀬戸美濃鉄釉茶入	45			グレイみのブラウン	外面径より2.5cm程まで魚鱗、内面全面魚鱗、底部糸切成		" 10
"	16K11H	" 灰釉皿	85			グレイみのオリーブ	見込部の印花文、受付に輪がたまる、トチ辰		" 11
"	17 K 9	込付皿	27			緑みの白	幕間底十字花文外面高台露胎花、受付砂付着		" 12
"	16, 17K	瀬戸美濃鉄釉袋物	82			グレイみのブラウン	外面光沢のあるブラウン、内面淡い赤褐色、露胎の底は糸切成		" 13
"	17K11H	越前漆鉢				グレイみのオリーブ	口縁下1cmに沈線が巻る1単位9条の縞し目		" 14
"	17K 7 II	"				ベージュ	縞し目がなく密に施される		" 15
"	16K11H	"				黄みのブラウン	口縁下の割不明瞭、1単位8条の縞し目が口縁まで巻る		" 16
"	16K19H	"				グレイみのブラウン	口縁が体部より薄い縞し目は1単位10条縦走の部分あり		" 17
"	17 K 8	"				ベージュ	1.8-1.5cmの縞し目間隔で1単位9条の縞し目が口縁まで巻る	ミソ10	" 20
"	16K18H	"				グレイみのブラウン	縞し目が密に施され重なりみられる		" 18
"	16 J 2 II	越前漆鉢				" のオリーブ	口唇平らに成形、波状輪目文、内面やや突き出気味、縞目1単位7条		" 19
"	16K17II	越前漆鉢	353	138	111	ベージュ	口唇丸味を有す、縞し目1単位12条、底部立上り無調整のためでこぼこ		23-1
"	17 K 6	"	330	121	110	"	口唇鋭角ではほぼ水平、縞し目1単位10条、スス付着		" 2
"	17K 6 I	"	333	150	125	"	口唇丸味ではほぼ水平1単位9条の縞し目が口縁まで巻る		" 4
"	16K17II	越前漆鉢	155	316	360	グレイみのブラウン	外面口縁直下に1条の間隔内面輪縞み成		" 5
空 塚	瀬戸美濃灰釉碗	125	60	58		グレイみの黄	彫削及び高台部に極細い沈線が巻る見込無文		5-1
"	青磁皿	124	51	29		グレイみの黄緑	桜花裏、見込、高台内に沈線		" 3
"	白磁皿	118	65	23.5		黄みの白	ネリ皿、底部から一気に外反、楊枝状		" 4
"	"	115	59	22		"	丸皿、受付のみ露胎		" 4
"	"	120	63	30		"	端反り口縁、赤磁全面施釉		" 5
"	" 小杯	77	25	30		"	全面施釉、張り急した腰部から立ち上る、見込配の目		" 6
"	瀬戸美濃灰釉皿	90	55	23		グレイみの黄	端反り口縁、輪トチ辰高台半輪割り成りか?見込底化付物着		" 7
"	" 青磁鉢	129				"	腰以下露胎、見込縞のすか施釉、受付中心のみ赤磁		" 8
"	越前漆鉢	325	140	99		うすい黄	口縁外反度が少ない体部口縁直下浅い間隔し目1単位11条		" 9
"	込付碗	156	61.5	62		緑みの白	端反り口縁、受付面取り、露胎、口縁内面に露胎を有し外面体部露胎、露胎芭蕉葉文を有する、底部は不明		22-2
"	越前漆鉢	309	130	111		グレイみの黄	口唇鋭角、内剛が気味、縞し目1単位9条		23-3

表 2

出土遺物観察表 2 金属製品・木製品

地区名	出土地点	種別器種	法 量 mm			特 徴	備 考	図版 番号
			長	巾	厚			
空 塚		鉄 鍔			(4)	底に足がつく 足長42 mm	5-10	
"		"			(4)	底に足がつく 足長40 mm	11	
空塚B係	15 J 12	鎌	(150)	50	2	平作り	13-1	
"	15 J III	"	165	15	3	"	2	
"	15 J 16 II	釘	105	15	3	さっぱ釘	3	
"	15 J III	環	41			大き3 mm	4	
第二平塚	16 L 20 III	鍔	90				24-1	
"	16 K 10 I	"	106			断面丸 空洞、最大径10 mm 最小2 mm	2	
"	17K8ミゾ4	"	98			先端部に行く程薄く扁平になる	3	
"	17K11,12II	器種不明	(139)	20	20	断面長方形	4	
"	16 K 17 II	"	(143)	17	4	全体に薄く扁平	5	
"	16 K 17 P 335	"	(216)	23	14	基部1部欠損、先端となる	6	
"	16 K 9 II	杖、鉄塊?	(138)	20		先端部に行く程薄くなる	7	
"	16 K 17 II	カスガイ	(72)	9	4	残長72 mm	9	
"	17K11,12II	釘	139	6	6	断面方形、丁形の傘がつく	8	
"	17K11,12	カスガイ	113	12	5	大型	11	
"	17K10土坑4	釘				断面方形 残長24 mm	12	
"	16 K 12 II	環	長径80×短径77			断面方形、楕円形の環	13	
"	17K10土坑4	釘				断面方形 残長58 mm	14	
"	"	"				" " 47 "	15	
"	"	"				" " 45 "	16	
"	"	"				" " 43 "	17	
"	"	"				" " 43 "	18	
"	"	"				" " 37 "	19	
"	"	"				" " 25 "	20	
"	整穴 38	鉄 鍔			(5)	吊耳を有す、注口つき	25-1	
"	17 K 14 II	蓋			(6)	蓋蓋又は鉄びんの蓋、真中に18 mm程のつまみがつく	2	
"	16K1土坑III	鉄 鍔			(4)	吊耳を有す、口縁はゆるく外反する	3	
"	16 K 19 III	茶 釜 ?			(3)	口縁垂直に立上る	4	
"	16 K 21	鉄 鍔			①-⑤	底径532 mm、底の厚さ5 mm、側面厚3 mm	5	
"	16 K 16 P 412	銅 鍔	73		2	9個の菊花文、縁は亀で双鳥と挿す、縁の高さ5 mm	25-18	
空 塚		"	89		3	菊花文、青銅で区切られた外帯は放射状の線刻、縁の高さ7 mm	11	
第二平塚	16K4土坑8	弁	(76)	11	2	扁平で中央に高さ1 mm 幅2 mmの帯が走る銅製	12	
"	整穴 38	八 双 金 具	(72)	18	1 弱	磨光調整に七五五を磨き菊花文を彫る、表面に金	25-13	
"	16 K 24 II	煙 管	(38)			煙首 銅製	14	
"	16 J 6 II	煙 管	(62)			煙首 "	15	
空 塚		器種不明	(306)	97	49	端部細く作り出す、片面クギが2本打たれる	6-1	
"		"	235	98	64	方形の材、手拵での削りあと残る	2	
第二平塚	17L10P172	礎 板	245	77	17	方形の厚みのある板のカドが全て面とりされている	柱穴より	
空 塚		柱	(274)	68	60	杭状	4	
第二平塚	17 K 12 P 212	"	(238)	36	13	杭状	柱穴に残存	

表 3

出土遺物観察表 3 木製品

地区名	出土地点	種別器種	法 量 mm			特 徴	備 考	図版 番号
			長	巾	厚			
第二平田	ITL10P172	柱	(471)	42	38	枕状	柱穴に残存	6-6
"	ITL15P171	"	(333)	111	67	腐蝕で先細りをなす、角? 枝材	"	7
空 塚		器 種 不 明	(216)	115	49	断面長方形		8
"		"	(431)	49	15			9
"		"	(291)	56	1			10
"		刺 突 具	123	14	10	鎌倉部に逆釣、表面をえぐるように面取・基部けずり出しあり		7-1
"		"	122	9	9	鎌倉部39mm 細く長い基部がつく		2
"		簾	73	13	11	鎌倉部42		3
"		刺 突 具	111	10	5	身背面凹みを有す		4
"		中 柄	100	15	8	基部にけずり出しあり		5
"		簾	62	7	5	細く華奢に作られる		6
"		中 柄	72	10	7	基部けずり出しあり		7
"		矢 柄	(360)	24	20	全体に丸味を持った作り一端欠損		8
"		"	(430)	9	9	断面円形、一端に10mm 程のえぐりを作る一端欠損		9
"		"	(285)	9	7	断面楕円形。表裏面とも11mm 程そき落し4mm のえぐりを作る一端欠損		10
"		"	(213)	8	7	一端扁平にし6mm のえぐりを作る一端欠損		11
"		籠	95	94	14	板皮、図13の上を覆う		12
"		"	85	66	3	図12の本体		13
"		柄	120	33	19	断面楕円形、一端に4×14mm 深き67mm の穴を打つ		14
"		器 種 不 明	80	31	13	凹に作り出し木釘を斜めに流す		15
"		籠	218	35	21	断面かまぼこ状で凹凸感、1枚の内側を折る 裏面 縁部を有す。表面・身背面にて穴の痕あり		16
"		羽子板状木製品	464	(89)	10	羽子板状に整形、柄の付け根を山なりに加工、片面 欠損		8-1
"		"	380	68	8	羽子板状に整形		2
"		タモワク?	355	232	7	柄部分に2コの孔をもつ		3
"		器 種 不 明	103	25	3	先端部に行くほど薄く加工、柄部分潰傷		4
"		"	310	28	3	柄先端部細く尖らす		5
"		"	372	51	15	断面かまぼこ状両端に溝状の割み中央十字の割み 裏面扁平、上下端ともU字形に削り落す		6
"		棒 状 木 製 品	924	28	17			7
"		櫛 ? ヘラ	(1260)	112		先端部ほど薄く加工柄先から560mm 位置に巾約80 mm 凹あり		8
"		棒 状 木 製 品	1346	30	28	断面は4角、両端部を丸く加工		9
"		取 手 ?	200	(58)	9	径6mm の孔2個あり		9-1
"		曲 物	92	67	2	厚さ2mm 前後の側板を意板にのせ板皮で覆る		2
"		折 敷 状 木 製 品	65	63	5	3つの孔あり、孔の1つに結び目のある木皮がある		3
"		"	260	260	7	巾10mm 前後の不規則なけずり跡のある本体部と 側板を木釘で箱型に作る内面黒染が施られる。外側 へりに8印が彫られる本体裏に切痕あり、或いは箱 のフタか		4
"		折 敷	350	320	4	巾10mm 前後の不規則なけずり跡のある意板と側 板は四辺各々2ヶ所ずつ板皮で覆じる意板裏表に切 痕あり。両裏面の切痕は密で1本毎の通りが困難		5
"		曲 物				厚さ3mm 前後の側板を二重に回す木製紐状(16 mm 巾)のもの。5本で幅約2mm の板皮で覆る		6

表4

出土遺物観察表4 木製品・骨角器他

地区名	出土地点	種別器種	法量 mm			特 徴	備考	図版 番号
			長	巾	厚			
"	"	人形	311	16	17	全長の上1/3程に人形がつくれ以下丸棒状をなす。下端は丸味をもつ。棒部上下をえぐり脚足部を表す。頭頂に凸起がつくマダカ。頭頂部に墨を塗る。顔のつくりは立体的		10-1
"	"	器種不明	180	44	35	断面やや三角形上部30-35mm位置を3ヶ所えぐる墨け痕あり		2
"	"	棒状加工品	(138)	14	7	断面楕円形上部10mm位置内側をえぐる		3
"	"	箸	(205)	7	6	上部5mm位置に巾3mmのえぐりを通す上半扁平に近く下部は多面棒状に彫刻。上部より50mm位置に10mm程の凹みあり。手なれか。先端部欠損	3と封か	"
"	"	箸	(106)	5	5	上部5mm位置に巾3mmのくびれを通す 下半欠損		5
"	"	棒状加工品	(175)	13	8	断面楕円形上部42mm位置をえぐる 一端欠損		10-6
"	"	木 簡	203	27	4	上部18mm位置内側をえぐる墨書は認められない		7
"	"	"	180	27	5	上部18mm位置内側をえぐる上部角を落す墨書は認められない		8
"	"	へら状木製品	215	16	3	上部15mm位置内側にえぐり。190mm位置片側えぐり一方は三角形に切り落す		9
"	"	栓	?	58	7.5	断面は12円。丹念に丸く整形上部8mm位置にえぐりが一通する		10
"	"	木 簡	113.5	24	5	上部35mm位置内側をえぐる墨書は認められない		11
"	"	器種不明	83	18	4	上部ながらかな山形に彫刻上から15mm位置と60mm位置に径8mmの孔あり		12
"	"	へら状木製品	117	9	3	竹製。下部に行く程にうすく尖らす 先端部わずかに欠損		13
"	"	器種不明	(175.5)	5	1	うすく、ていねいな整形上から21mm位置に径4mmの孔あり。先端部欠損	瓶子のホネか?	14
"	"	"	250			木皮等の繊維をやや中央130mm程まで右側に燃ったものを結びとめる		15
"	"	縄	185	約30		15mm太き程に燃ったもの3本を右側に燃りによる		16
"	"	不 明	300			巾10mm径の4本の繊維束を左側に燃らしたものの		22
"	"	織 維 束	210			3-4mm巾の木皮の繊維束を小袋に結んだもの		23
"	"	うるし 機	183	66	49	内面朱漆塗り。外面黒漆塗り。朱で草花の文様。高台内朱で上と記す		17
"	"	" 風		52	21	内面黒漆塗り。外面朱漆塗り		18
"	"	" 杯 ?	9	52	26	内面朱漆塗り。外面黒漆塗り。朱で草花の文様		19
"	"	" 櫃	150	80	75	内面朱漆。外面黒漆塗り		10-20
"	"	"	148	70	69	内外面黒漆塗り		21
"	"	"	130	69	55	内面朱漆。外面黒漆塗り外面朱で松と笠の文様		24
"	"	しやもじ				内面黒漆塗り。着柄の穴あり		25
"	"	下 駄	195	85	20	巾巾120mm高さ84mm		11-1
"	"	"	215	100	40	舟型の台の露布下駄。高さ76mm。指板有		2
"	"	"	188	100	25	右歯はほぼ長方形前歯きわにノミ板有。右足で使用		3
"	"	"	145			前歯削られる。後歯はなし。再加工過程のものか		4
"	"	"	230	130	20	歯の摩耗が激しい。高さ30mm		5
"	"	"	238	98	9	歯が前に1つ。歯より110mm位置内側面にえぐりが入るその下かけ紐の跡が交叉して残る		6
"	"	下 駄	210	106	19	前後とも歯が4-2mm残る		7
"	"	中 柄	98	8.5	7.0	クジラ骨 体部先端形とも断面方形		5-15
"	"	刺 突 具	100	8.0	7.0	クジラ骨体部断面楕円形断面中部断面円尖鋭な作出基部1部欠損		16
"	"	装 飾 品	33	28	15	シカ角を楕状に加工 断面かまぼこ状		17
第二平里田	17K16土倉4	中 柄	(116)	6	6	クジラ類。先端部欠損。2次加熱(図天地連)		25-6
"	17L15 ミノ18	"	(82)	8.5	8.5	" "		7

表5

出土遺物観察表5 骨角器・石製品他

地区名	出土地点	種別器種	法量 mm			特徴	備考	図版番号
			長	巾	厚			
"	MKIIミゾ15	中柄	(78)	5	5	クジラ類、先端部欠損、2次加熱		25-8
"	16 L 20 III	駒		9	3	シカ角を輪切にし外縁整形		25-9
空壕		茶臼				受皿を有す 下臼、磨面欠損のため清等不明		5-18
"		砥石	154	61	60	柱状8面体、刃等による切痕が多い面、ごく僅らかな面あり		19
"		石錘	61	45	40	管状		22-21
"	16, 17 K I	石鉢				器高60-38 mm、平底		23-6
"		るつぼ	64	18	19	軟質粗面な素焼、赤褐色を呈す 成形手びねり、銅線が残存緑青付着		5-12
"		"	80	24	25	"		13
"		"	110	29	30	"		14
	27 K	玉	9		4.5	直径0.4E ガラス玉 明るいターコイズ		25-16
第二平坦面	17 K 6 II	"	11		9	≒ 1.8E " くらい赤とグレイみの質のしま		17
"	16 M 23	"	7.5		7.5	≒ 0.5E " つよいグリーン磁粒による曲線の残存		18

III 小 括

1 前年度迄の調査

昭和62年度に自然研究路南西の第二平坦面端部から直下の第一平坦面に2×18mのトレンチを入れ、第二平坦面端部に櫛列跡、直下に二重の空壕跡を確認した。空壕覆土の出土遺物に唐津、志野の見られないこともあって、16世紀前半のものが多かった。

63年度に自然研究路南西半の櫛列跡、空壕跡二条、壕外、東の小平坦面の遺構確認調査を実施し、櫛列、二条の空壕、壕北東の小平坦面が同時併存の可能性のあることを述べた。そして壕東の小平坦面出土陶磁器は15世紀～16世紀末と勝山館存続の初期から廃絶期の間に亘っていることを示した

ところである。又空壕覆土中からは前述の唐津、志野等の出土も見るようになった。

平成元年度の調査では自然遊歩道北東半の櫛列跡、二条の空壕跡を確認した。第二平坦面の櫛列跡周辺では、櫛列附属施設を思わせる控え柱を検出するとともに、櫛列に直交する櫛列（溝）が館内平坦面に延長していることからその関連性も留意すべきこととなった。

更に櫛列を跨ぐ形で焼土溜り等が検出され、櫛列が設けられた端部の盛土整形の時期との関係も検討すべき事項となった。

他方二条の空壕のうち、外側のBとした壕を渡る施設、即ち橋の柱跡と推される柱穴が検出され、

(1) 空壕跡周辺

二重の空壕中央部分は、前年度迄に調査済みの両側と同じく岩盤を掘り下げて壕に作られていた。しかもこの壕は調査前には左右を喰い違いに作るかと推した程の出入りをそのままに、中央で大きく屈曲させて掘り切りしていた。その中央には橋が架けられているが、この壕と連続する第二平坦面の端部(櫓列)が屈曲した結果、橋は斜めに壕を横断する形になっている。又、橋柱掘り込み面の標高差も約2.0mあり、上り勾配の橋であったと推される。橋を渡り切って立つ第二平坦面の平地は、館の中央を通る通路面であるが、そこは左右の櫓列に囲まれた、建物跡の立つ第二平坦面よりは一段低く、1.5~2.0mの高低差があり、櫓列や壕の屈曲に従い、内に引き込まれた位置に当たっている。通路の中軸線と、館の中軸線は橋が斜めに架けられていることもあって、折れ曲って交差し、その屈曲点には、一部攪乱されているが、橋ないしは、門、木戸様の遺構を伺わせる土壁や柱穴があった。

こうした壕や橋、櫓列等の構成は城館の虎口部分の防禦を強固にする為の工夫であり、城郭用語にいう、折邪、筋違(斜)橋、(丸)横矢とすることができよう。

又、空壕内傾斜面の橋柱穴両側につくられた溝跡も橋への左右からの取り付けを防ぐ為のものであろう。

これらのことから、館の主体部分中央に通路を通し、その正面に二重の空壕、橋、櫓列(門)で囲める構成は一貫した計画のもとに、ほぼ同時に成立したものとすることができる。その時期は前年度出土の土壁一括遺物から16世紀の前半、第1四半期頃迄と推すところである。又その存続期間は、本年度調査の空壕出土遺物から16世紀後半、第四半期の勝山館の終末近くまでの間と推すものである。

空壕Aの中央が埋められ、土橋状の通路?に細い杭状の柱列の立てられた時期や期間、そのつくりはなお不明であるが、それが最終のこの部分の様相となるのであろう。

空壕A・B間の小さな平坦面が、空壕Bの存続していたある時期に削平、作出され、Bを渡る橋が取り付けられていたことを示すところとなった。これは少なくともある期間空壕AとBとが同時併存していたことを示すこともなった。

更に、この空壕を渡る橋の東平坦面側の柱跡に接して、越前小甕、青磁、染付、美濃灰釉の碗皿計15点が一括埋納された土壌が検出された。壕Bとの前後関係は層序等若干決め手を欠くが同時又は、壕(橋跡)が新しいと解されるようであった。

青磁は15世紀後半、瀬戸美濃の豆皿は大塚のI期と推される。染付は端反り獅子皿と算木文風の蓮子碗である。獅子皿は存続期間が長く、その間に変遷を見るとは推しているが、未だ筆者にはなし得ないところである。

勝山館跡出土染付碗について、かつて筆者は類型化を試みたことがある(本報Ⅳ)。第I、VI群については留保したいが、端反り口縁、蓮子碗、腰部の張る直口縁碗、饅頭心のII~V群がその主なものであり、大橋康二氏のI~IV類(大橋, 1981)小野正敏氏のB~D群に対応するものである(小野, 1982)。勝山館染付碗II~IV群の変遷が実年代と齊一になるものではないが一応の目安とはなり得るものと推している。II群は尻八館遺跡出土例から(三上他, 1981)15世紀の中に納め得るかと推されることであり、文明五年に館神八幡宮が創祀された、勝山館築城の初期に当るものと推すところである。従ってこの土壌に一括埋納された碗皿類の中では蓮子碗が16世紀前半、第1四半期頃に比定し得るかと推されることである。又越前小甕は肩部に陰帯を貼付するもので、IV期後半に類例があるようであるが(越前名陶展1986)、口縁が肥厚し、水平につくられる口端が若干内傾する等の違いがあり、幾分後出の、染付碗の示す年代に近いものかと推すところである。これらのことから空壕Bを渡る橋は16世紀の第1四半期頃には架けられており、15世紀に高遷る可能性は少ないとすることができ、それは又、空壕Aが掘り上げられ二重の空壕が完成する時期でもあろうと想定するところとなった。

註) 15・16世紀における日本出土の青花碗に関する編年試案(1) 大橋康二 白水 No. 8, 1981

15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代 小

(2) 柵列周辺

通路北東側の第二平坦面端部の柵列に直行して、南西方向に6m程の溝と柱穴列が見つかった。一方柵列に併行する溝15がこれに鉤の手に設けられ、不定形ではあるが、約80m²程の空間、広場が柵列の内側に作られている。この空間の東側には柵列に平行する2個一對の柱列がある。空間の南は空壕を渡る橋が取り付く一段低い、通路との屈曲点となっている。

この柵列の内側に溝と柵で囲まれた空間は、城を防禦する城内勢力の展開する場所であり、所謂武者溜りとして良いかと推すものである。又、柵列に平行する柱穴列は横長の、柵・城壁に沿う槽の類とすることができよう。

(3) 建物跡

館の中央を通る通路に沿って溝と低い段で画された地割面があり、建物跡が見つかった。建物は掘立柱と竪穴の建物で、相互に前後関係があり、溝（地割面）とともに幾度かの造りかえ、建て替えがなされている。

中央通路は少くとも1回付け替えが行われているが、この通路を横断する溝もあり、通路の形成即ち、二重の空壕、橋、柵列等が整う以前の地割面、更に建物跡が推測されたところである。

遅くとも第5号、6号建物跡の建てられた時にはこうした構成が出来上っているものと推測したところであるが、整理作業が不十分で、個々の建物跡、溝等に伴出した遺物を確定できない状況にある。この為こうした遺構の形成年代が空壕跡等のそれに想定した16世紀の前半、第1四半期頃という時間帯と矛盾がないかは、まだ確定し得ないが一応の目安として仮定しておきたい。

(4) 遺物

空壕跡から大量の木製品等が出土し、勝山館跡の生活内容が更に豊になった。人形?の出土は、北日本には殆んど例のないものであり、その形態は同時期の他の遺跡を通して稀なようである。削り放しの箸に混って、頸部を作り出した一膳の箸、扇子の骨などともに留意されるものである。下駄にも数種のバラエティーがあり、漆器、曲物なども豊富である。武器・武具では弓に矢柄が新たに加わっている。金箔押しのは八双金具もある。柱材や板材、椀等の建築部材も増加した。種子、獣・魚骨等も生業、食生活の両面を更に具体的に

知る手掛とならう。

るつぼが3点以上も出土したということは、勝山館内の手工業技術の巾を広げるものである。従来大量の鉄製品、鉄滓、鍛造剥片、羽口等が出土し、館内での鉄の豊富さは何度か述べて来たが今年度の鉄鍋が炉に転用され、しかもその鉄鍋を取りはずすことなく建物の建てかえ時に柱穴で破壊するという状態は驚き以上に呆れる程である。他方その鍋を使用中は銅で補修してもあるが、本年度出土のるつぼに緑錆状の付着の見られたことは、こうした技術も館内に備えられていたことを示すのであろう。蛇足ではあるが、鉄鍋を再加工して他に造りかえる技術は当然存在していたはずであり、むしろ鉄鍋片が鉄製品の素材として注目されたこともある（本概報VI、大澤正己氏）。

陶磁器の中に勝山館の成立年代を遡るものがあることが愈々明らかとなった。目下の所白磁の一群に限られているが、その経路にも留意することが必要であろう。63年度空壕覆土中から高台のしっかりした厚手の皿と推される破片が出土し（本概報XPL.8, 14-65）ていたが、今年度は軽口縁の外反する碗2個分、口売げの碗1点を追加するところとなった。

上ノ国町内では洲崎館跡から双鱼文の押された青磁皿（拙稿1992）や上ノ国市街地から珠洲1期に属する壺（大場他1950、吉岡1979）が出土しているが、こうした陶磁器の流入量、時期等に今後注意することが必要である。尚口売げの碗は函館市志苔館からの出土が知られている。

又、従来確認できなかった中国製の天目茶碗3点（個体）や、所謂呂宋壺と呼ばれる褐輪壺の破片が出土したのも新しい知見である。天目茶碗は志苔館に出土例がある（志苔館跡 1986年）。

他方染付の中に館の終末期に関わると思われる一群が多く見られたことも留意される。他遺跡でのまもまった出土例を知ることができず、ためらう所ではあるが、従来の勝山館出土品では殆んど欠付けなかった一群である。これらの遺物は館の終末や、壕その他の存続年代に大きく関わっているものであり、今少し検討することにしたい。

表6 陶磁器集計表 (総破片数)

	畿 内						国 産										合計	調査区外内数	不明内数				
	青磁	白磁	込付	赤絵	刺繍	小計	瀬戸・美濃 灰類 灰物	信楽	土器	小計	麻割	越前	美濃	伊豫	信楽	小計							
近畿 平野 中 山	陶	8	1	20		29	2			2	(13)					2	31	7	28				
	磁	5	28	29		62	29			29	(91)					29	91	8	99				
	灰		1				1				(1)						1	4	5				
	磁	1					1				(1)						1	1	1				
	香か																						
	磁鉢											15					15	15	15				
	薬合鉢											10					10	10	3	13			
	灰物																		2	2			
	その他																			3	3		
	計	14	30	49			53	31			31	(124)	25				56	149	27	126			
中 山	陶	5		7	5	17	1	2		3	(20)					3	20	4	24				
	磁	6	11	14	1	32	9	1		10	(42)					10	42	2	44				
	灰		1				1				(1)						1	1	1				
	磁																						
	香か																						
	磁鉢												5				5	5	5				
	薬合鉢											9					9	9	9				
	灰物																						
	その他																						
	計	11	12	21	6		50	10	3		13	(63)	14				27	77	6	83			
近畿 平野 中 山	陶	4		8		12		2		2	(14)					2	14	4	18				
	磁	8	10	19		37	7	28	1	1	37	(74)				27	74	4	78				
	灰																						
	磁																						
	香か																						
	磁鉢											14					14	14	14				
	薬合鉢											5					5	5	8	13			
	灰物																		3	3			
	その他																		1	1			
	計	12	10	27			49	7	30	1	1	39	(83)	19			58	108	19	127			
近畿 平野 中 山	陶	65	11	147	1	224	35	56		1	92	(214)				92	316	44	360				
	磁	66	323	316	8	713	408			2	419	(1,123)				421	1,124	9	1,133				
	灰																						
	磁		17				17				(17)						17	4	21				
	香か																						
	磁鉢																						
	薬合鉢																						
	灰物																						
	その他																						
	計	12	10	27			49	7	30	1	1	39	(83)	19			58	108	19	127			
近畿 平野 中 山	陶	05	11	147	1	224	35	56		1	92	(214)				92	316	44	360				
	磁	66	323	316	8	713	408			2	419	(1,123)				421	1,124	9	1,133				
	灰																						
	磁		17				17				(17)						17	4	21				
	香か																						
	磁鉢																						
	薬合鉢																						
	灰物																						
	その他																						
	計	135	351	463	9	2	960	446	57		3	508	(1,486)	346	3	3	857	1,819	86	1,905			
近畿 平野 中 山	陶	150	56	177	2	385	52	88		3	144	(530)				144	503	27	530				
	磁	96	267	315	2	680	333	2	2	34	1	(1,332)				332	1,332	11	1,343				
	灰																						
	磁		12	5			18				(18)						18	4	22				
	香か																						
	磁鉢																						
	薬合鉢																						
	灰物																						
	その他																						
	計	150	56	177	2	385	52	88			3	144	(530)				144	503	27	530			
近畿 平野 中 山	陶	181	739	893	11	1,824	103	31	3	14	4	(2,081)				103	2,084	34	2,118				
	磁		31	5			37				(37)						37	12	49				
	香か																						
	磁鉢																						
	薬合鉢																						
	灰物																						
	その他																						
	計	250	466	607	4	8	1,369	387	95	3	17	2	(794)	(2,079)	770	1	3	1	3	(1,183)	2,851	165	3,016
	近畿 平野 中 山	陶	232	42	359	9	641	90	149		3	243	(984)				243	984	116	1,099			
		磁	181	739	893	11	1,824	103	31	3	14	4	(2,081)				103	2,084	34	2,118			
灰																							
磁			31	5			37				(37)						37	12	49				
香か																							
磁鉢																							
薬合鉢																							
灰物																							
その他																							
計		422	812	1,257	18	10	2,529	103	185	4	17	6	(2,875)	1,174	4	4	1,174	2,048	116	2,164			

() 調査区外内数 ○ 産地不明内数

表7 木質遺物集計表

種別	名称	点数	備考	
	下駄	21		
食膳用具等	容器類	曲物(小)	41	
		〃(中)	16	
		折敷	75	
		箱	1	
		底板(円形)	41	
		〃(方形)	16	
		把手	3	
		箸	1432	完形267
		串	18	
		ヘラ	8	行子1 菓子板状のもの2
	計	1651		
建築部材	柱材	丸柱	24	
		角柱	13	
	杭	丸太杭	46	
		角杭	30	
	加工木	角材	119	
		板材	87	
		丸材	127	
	柁	680	長柁8	
	計	1126		
武器		23	矢柄・鐵(形)弓	
丸棒		3		
木筒		5		
人形代		1		
織維束		110		
繩		10		
木皮		65	桜・樺皮	
用途不明品		33		
加工木	四面成形	1230	箸素材?	
	多面成形	234		
雜木・自然木		1762	加工時の切削片 自然木	
竹		26	根曲竹・笹竹	
合計		6300		
漆器	碗	9		
	皿・杯	2		
	器種不明	19	小破片	
	計	30		

表8 金属製品・鍛冶関連遺物集計表

種別	数量	点数	重量(g)	備考
鉄製品	調理具	557	27,974.6	
	鍋	(542)	(27,700.9)	
		(15)	(237.7)	
	建築用具	561	5,022.3	
	角くぎ	(394)	(1,813.0)	
		(23)	(504.3)	
		(144)	(2,705.0)	タガネ・カスガイ
	武器・武具	40	550.9	鉄鎌・小札他
	漁具	6	300.7	鈎他
	(農具)	4	181.2	鎌
その他(7月)	4	361.0	2個体	
不明	285	4,353.7		
計	1,457	38,744.2		
鋼製品	武器・武具	13		
	宗教具	4		錠2(化粧具?)
	鋼錢	147		内訳不明
	その他	38		用途不明
	計	202		
合計	1,659			
鍛冶関連遺物	羽口	7		陶製5個体
	るつぼ	3		鋼滓付着
	鉄滓	136	5,129.0	碗形滓他
	鐵造剥片		11.5	
	計	146	5,140.5	

銅錢内訳

錢貨名	枚数	備考
開元通宝	5枚	(唐)
太平通宝	1枚	(北宋)
祥符通宝	1枚	〃
天聖通宝	1枚	〃
皇宋通宝	2枚	〃
元豐通宝	3枚	〃
元符通宝	1枚	〃
大觀通宝	1枚	〃
洪武通宝	1枚	(明)
不明	102枚	21枚1括他
朝鮮通宝	1枚	(朝鮮)
小計	118枚	
寛永通宝	28枚	内鉄銭1
計	147枚	

表9 骨角製品・石製品他集計表

種別	数量	点数	備考
骨角器	中柄	17	
	刺突具	1	
	不明	24	
	計	42	
骨角製品	環状製品	2	
	円盤(コマ)	1	
	計	3	
未製品	3	鹿角他	
合計	48点		
種別	数量	点数	
石製品	石鉢	3	
	碗	1	
	茶臼	3	
	砥石	67	
	錘	4	
	角磨(くまひ)	1	
	軽石	1	
	その他	85	円・扁平碟他
合計	165点		
土製品	10点	陶鍾(羽口、もつばは別掲)	
ガラス玉	4点		

IV 保存処理

1 鉄製品

207点の処理を行った。従来通り錆除去、メタノール脱水、パラロイドNAD-10のナフサ溶液20～30%による減圧含浸、接合等を行なった。処理の内訳は鍋、火箸、釘、鋸、小札、小柄等である。

2. 木製品

昭和63年度までPEG含浸処理を完了した木製品のうち1600点をエタノールによる表面処理を行なった。処理の内訳は箸、下駄、曲物、板材、角材、杭等である。

A.PEG含浸

水浸状態で出土し含水率が高くなっている木製品の場合、出土後自然乾燥させると木製品内部の水分が蒸発し、木製品自体に収縮、亀裂等の現象を引き起こす事は周知の事である。しかし出土後も水浸状態を保っておく事は水の入れ換え、場所の確保等種々の問題が残る。そのため水浸状態より開放するために処理を施す必要がある。当町では一般的に行なわれていたPEG含浸を行なっている。これは木製品内部の水とPEGを置換させる事を目的としている。木製品内部に入ったPEGは親水性があるため、低濃度PEG水溶液より徐々に高濃度水溶液へ含浸させた木製品内部の水分が徐々にPEGと入れ替わっていく。そのため木製品に収縮、亀裂等を起こさせるものでない事は一般的常識となっている。但し、その処理を急ぐあまり、PEG溶液に何らかの薬剤(アルコール、エポキシ樹脂等)を混入した場合は別であるが……PEG含浸においては木製品内の水分とPEGが結びつき、徐々に木製品の水分がPEGに置換される事を原則としている。しかしPEGは他の薬品に比し作用が穏いため、他の薬品(アルコール)を混入した場合、先にアルコールが木製品に作用し、内部の水分を外に追い出してしまうため、内部には少量の水分しか残留せずPEGも殆ど含浸していかない事となる。この溶液より取り上げた木製品は内部に多量のアルコールを含んでいる事となり、当然の事ながらアルコールの作用により収縮等の現象を引き起こす。

B.PEG含浸完了後の表面処理

現在までエタノールによる表面処理はエタノールが木製品に影響を与えない程度で木製品表面の余分なPEGを除去するのを主目的とし、表面のPEGによる黒化除去は第2次的なものと考えていた。そのため表面処理はエタノールで木製品をブラッシングし、表面の余分なPEGを除去するのみにとどめていた。しかし木製品のPEGによる黒化除去の徹底化、効率的な方法の検討を迫られた。そのためエタノールを使用している木製品表面の黒化除去の徹底化による木製品への影響、効率的な方法を検討した。

①表面処理法

出土時に含水率が高く脆弱化していたもの、出土時より比較的しっかりしていたもの各4点、計8点を抽出し、表面処理中、表面処理後の収縮率、重量変化率、木製品表面の変化等を追った。尚表面処理の方法は下記の4通りを行なった。

㊸エタノールによるブラッシング後、エタノール浸漬。その後毎日決まった時間にブラッシングし、再びエタノール浸漬する。これを毎日繰り返す。

㊹木製品表面をガーゼでくみエタノール浸漬。

㊺エタノールによるブラッシング後、自然乾燥させる。その後毎日決まった時間にブラッシングし、自然乾燥させる。これを毎日繰り返す。

㊻木製品をそのままエタノール浸漬。

第26図、第27図のグラフでSは出土時より比較的しっかりしているもの、Zは出土時に含水率が高く脆弱化していたものである。第26図、SAは出土時より比較的しっかりしているもので㊸の方法により表面処理を行なったもの、SBは㊹の方法により表面処理を行なったものという意味である。以下SC、SD、ZA～ZDも同様の意味である。尚それぞれの寸法等は以下のとおりである。SA-184×43×23、SB-148×30×20、SC-128×27×15、SD-197×27×18、ZA-219×61×48、ZB-146×44×30、ZC-124×43×28、ZD-236×80×27(すべて単位はミリで長さ×幅×厚さである)。SA～SD、ZB、ZCはやや扁平な角材、ZAは丸材を半割したもの、ZDは板材である。

②計測法

SA~SD、ZA~ZDの各々の試料は各々の方法で行ない、エタノールによるブラッシング後自然乾燥させるSC、ZCを除き、すべて毎日決まった時間にエタノールより取り出す。その後温度20~25℃、湿度60~65%の条件下で2時間放置し、表面のエタノールが乾燥後、収縮率、重量変化、表面観察等を行なった。これを6日間行ない、その後各試料の表面処理をやめ2~3日間放置した状態のまま毎日計測、観察等を行なった。尚SAとSC、ZA、ZCは放置後8日、13日に再び計測した。

③収縮率

それぞれの試料の柾目方向、板目方向の長さを計測した。計測は柾目、板目ともに可能な限り木製品の表裏面を2ヶ所ずつ、ノギスで2~3回計測しその値を出した。さらにその後それらの値をもとに柾目、板目それぞれの平均値を出した。そして表面処理の前の柾目、板目それぞれの平均値を100としてそれ以後の収縮率をプラスの数字でグラフ上に表わした。尚収縮率は(処理前寸法-処理後寸法)÷処理前寸法×100で計算した。

④重量変化率

それぞれ表面処理前を100%として以後重量が減る毎に99%~98%とした。尚計算是処理後重量÷処理前重量である。

⑤計測及び観察結果(Sの場合)(第26図)

基本的に収縮は小さく、クラック等を生じさせなく、表面のPEGが最もよく除去できる方法がよいのである。この中でブラッシングをしたSA、SCが最もよく表面のPEGが除去できた。SAは柾目で5日目より若干のクラックが入り始めた。また表皮がわずかに残存している箇所では表皮が外層し始め放置2日目で剥離した。これは4日目の0.345%から5日目の1.074%の急激な収縮が要因と考えられる。SBは放置3日目で柾目、板目とも1%以上の収縮である。しかし表面は殆んど変化はなく安定している。SCは柾目で6日目より放置1日目にかけて微細なクラックがやや大きくなり、木口面にもクラックが入るようになる。これは2日目から5日目までの急激な収縮が要因か?しかし放置3日目で柾目、板目とも0.3%台の収縮に落ち着く。SDは表面に殆んど変化は見られない。放置2日目で柾目0.173%、板目0.743%

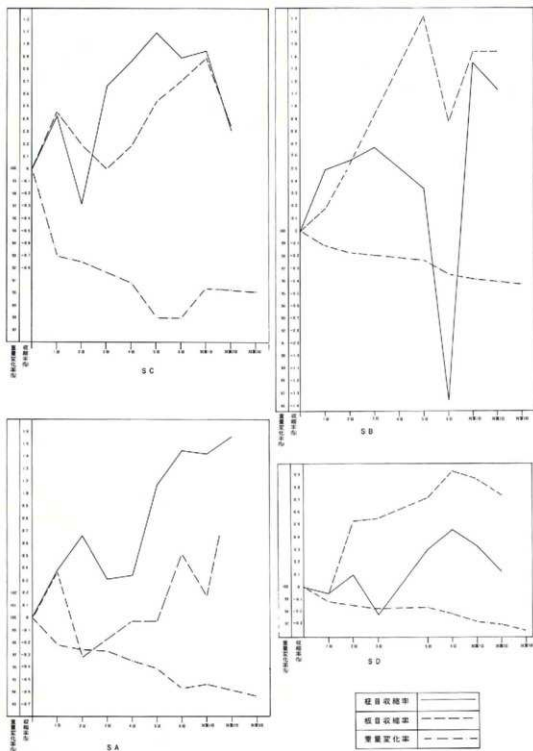
のわずかな収縮である。尚重量変化は放置3日目でSAは6.31%、SBは4.25%、SCは9.95%、SDは3.4%の減である。SB、SDは表面にクラック等も入らず殆んど変化はなかったが、表面のPEGは殆んど除去できなかった。SA、SCを比較した場合、SAがSCに比し収縮率が大きく、表面のクラックも大きかった。

⑥計測及び観察結果(Zの場合)(第27図)

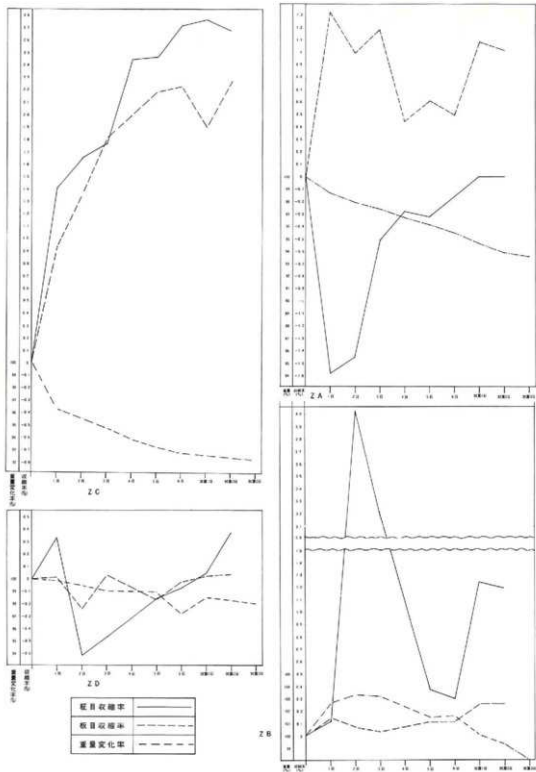
やはりブラッシングを行なったZAとZCが表面のPEGがよく落ちた。ZAは板目の中央部分に処理前より本体より剥離しそうな部分があったが、6日目で本体より剥離してしまった。またクラックも1日~5日まで殆んど変化がなかったが6日目~放置1日目にかけて3mm~5mm程縦に広がった。これらは、1日目~3日目にかけての1%以上の収縮、放置1日目の1.095%の収縮によるものと考えられる。全体にクラックが広がり、収縮がやや激しい。ZCは柾目部分にあったクラックが3.5mm程縦に広がったが、それ以外の変化は特に見られなかった。しかし収縮率は放置3日目でともに2%以上あった。放置2日目でZBは柾目1.193%、板目0.259%の収縮、ZDは柾目0.38%、板目0.038%のわずかな収縮である。しかし表面のPEGは殆んど除去できなかった。尚重量変化は放置2日目でZ A 6.474%、Z B は2.179%、Z C は7.858%、Z D は1.972%の減である。Z A、Z Cを比較した場合、表面の状態はZ Cが良い。

⑧まとめ

これらによりS、Zともエタノールブラッシング+自然乾燥のCの方法がベターであった。しかし木製品の表面のPEGによる黒化除去のための5日間にもわたるエタノールによるブラッシングは木製品自体に収縮、並びにそれに伴うクラックを生み、そして広げた。やはり従来通りCの方法に基づき木製品のPEGのみを除去するのが良いと考える。また木製品表面のPEGによる黒化除去については1日目のブラッシング後の色調とブラッシング最後の日である5日目のブラッシング後の色調では殆んど変化は見られない。



第26図 木製品、重量変化・収縮率クラブ



第27図 木製品 重量変化・収率率グラフ

V ま と め

三か年に亘る館主体部正面の遺構確認調査の結果、二重の空壕、櫓列、橋、溝(門、木戸)、通路、橋、武者留り、地刺溝、段、建物跡といった城館を構成する各種の遺構が明らかとなった。又、これらによる構成が整えられるのは16世紀前半、それも第1四半期である可能性が高いことも推されるところとなった。

一方記録によれば1514年颯崎(後松前)氏二代光広が松前へ本拠を移した後の、1529、1536年勝山館に瀬棚アイヌの攻撃がなされている。特に1529年の攻撃の時には『館の坂中平地の所』で『館の方を向き見上げ』ている大将タナサカシ(タナイヌ)に『矢倉』から(弓)を射たと記されている(新羅之記録)。これらから16世紀の前半に勝山館にとって大きな画期のあったことが知られるところであり、発掘調査結果と併せて、勝山館の変遷を明らかにすることが必要である。

又、建物跡の、更にはこの地区の館主体部における場の、性格・機能が未解明のままにあり、更に整理作業を進めなければならない。

北辺の片隅に築かれた山城に本州各地に見られるような築城技術が取り入れられ、法則に従って構成されていることは、勝山館の種々の内容からは当然とも言えるのではあろうが、やはり新たな驚きである。

建物の構造等も一部推測できそうであり、次第に館内部の様子も明らかにされるであろう。

出土遺物も更に多様となり、勝山館の人達の生活に広がりや厚味が加わることとなった。

中国製の天目茶碗や楊輪(四耳)壺といった茶器、箸、へら、漆器、下駄、籠などの日常生活用具、弓、矢柄、鏃、鎧などの武器・具、狩猟・漁撈具、鍛冶技術に加え、鑄造(銅)の技術を示すつば、板材、柱材等の建築部材、縄・織維束、更には人形代のような祭祀遺物など、勝山館の様々な人達の存在が窺われるところである。がなおまだ、木簡・付札状の散点、獣魚骨、種子等、何ら手の着けられていない各種遺物もある。16世紀前半、中央の通路を中心に左右に溝や段で地割りされた区画に各種の建物が建てられ、様々な人達が、四季を通じて多様な生活を営む空間が形成され、その主要部は壕や櫓などで嚴重に防禦される様相は、北日本の中世社会にあってどのように位置付けられるものであろうか。勝山館の様々な資料にはなお多くのことがかくされているようである。

しかし乍ら、これらの各種遺構と遺物の共伴、前後関係の精査という、発掘調査の最も初歩的な手続きの一つを見ても、未だ作業の途上にある現状は折角の調査資料の死蔵に等しく類推の繰り返しは、反古の山を残すばかりである。

まだまだ残された課題は大きく、筆者等の非力は覆うべくもない。一層の努力を期するとともに、諸先学、諸先生のご指導をお願い申し上げます。

圖 版







1、第二平坦面旧道跡(南西から)



2、空堀跡・槽列跡検出状況(南から)

1、空壕 A
(第三図 B—B')
(南東—北西)



2、空壕 A
(第三図 A—A')
(南西—北東)



3、空壕 B
(第三図 A—A')
(南西—北東)

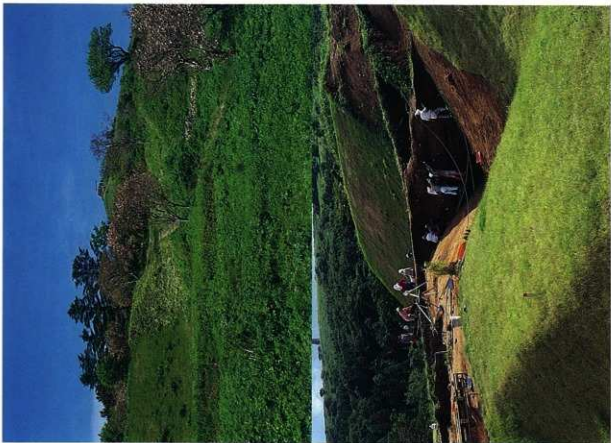


4、空壕 B
(15 J 1—11
南西—北東
ライン)





2、空襲被害調査(北から)



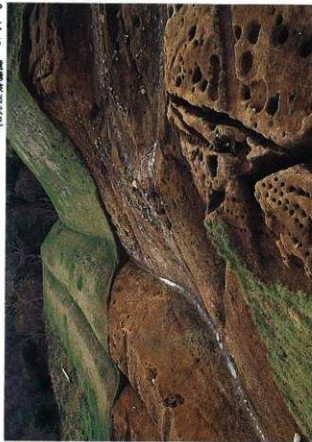
1、露樹田(東から)



3、4、第一平坦面・空襲被害調査(東・南から)



1、空堀・楯列・壕跡検出状況



2、溝・腰穴・柱穴検出状況(北西から)



3、掘立柱建物跡(南西から)



4、鉄鍋埋没位置





1、木質遺物出土状況(右)



2、下駄



5、人形(左)

4、折敷

6、人形出土直後(左)



4、漆器

7、陶磁器(左)

8・9、青磁(空塚跡及び北東第一平坦面)左)







1、白磁・赤銅陶器(右)



2、染付(右)



6、瀬戸赤濁灰緑磁、皿・香炉(左)



4、瀬戸赤濁、中国産磁、赤濁、土磁(右)



5、青磁(左)



9、白磁(左)







1、白磁(右)



2、染付碗(右)



6、瀬戸、美濃、中国、唐津、志濃、朝鮮(左)



4、染付皿(右)



8、瀬戸、美濃、鉄軸皿、飯、土器(左)







1、調査地点遠望（中央調査地点—東から）



3、調査地点近景（北東から—昭和35年頃）



2、調査地点近景（中央自然研究路—南西から）



4、調査地点近景（北東から）

P.L. 10 空壕跡調査状況

1、空壕跡・第三平坦面（北東から）



2、調査前（昭63年）



3、空壕跡A・B、楯列跡、橋柱跡、第一平坦面（北西から）



4、調査前（昭和62年）



P.L.
川空壕跡調査状況

1、第二平坦面・槽、空壕A・B、第一平坦面（北西から）



2、第二平坦面、空壕A（南から）



3、空壕A・B（北から）



4、空壕跡B土層地積状況
（15 T17南西壁）



P L . 12 空 壕 調 査 状 況 (橋 柱 跡)

1、橋柱跡・左右の溝（北東から）



2、橋柱跡・溝（左下・南西から）



4、橋・柱跡（南西から）

5、橋・柱跡支石



3、橋・柱跡（北東から空壕A斜面をみる）



P.L. 13 空壕跡遺物出土状況（木製品他）



1-2、曲物



P.L. 14空壕跡遺物出土状況



3、箱?



4、箸、鉞錢

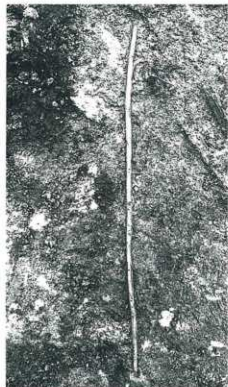


5-6、漆器





1、矢柄



2、弓



3、鏃？（木製）



4、鏃？（木製）



5、椽皮鞘？



1、箱、繩他



2、下駄



3、繩



5、織紐束



4、繩



1、種子



2、果実



3、獣骨(犬)



4、獣骨

5、銅鏡



6、るつぼ



P.L. 18 第二平坦面遺構検出状況



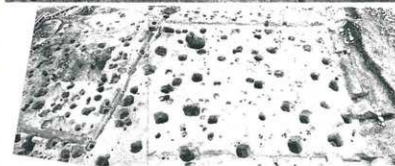
1、建物跡全景（南東から）



2、掘立柱・竪穴建物跡、溝跡（北東から）



3、5・6号建物跡・竪穴他（南東から）



4、5・6号建物跡、溝他（北西から）

P L、19第二平坦面遺構検出状況



1、調査区南西半 (北西から)

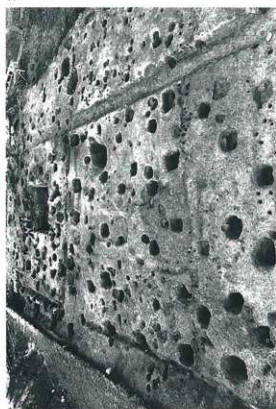


2、調査区北東半 (北西から)

3、第5、6号建物跡地 (南西から)

5、第5号建物跡 (南西から)

4、第6号建物跡 (南西から)



1. ミゾ15 棚列跡 (北西から)



2. 棚列・掃?跡、空壕跡 (南西から)



3. 棚列・掃?跡 (北西から)



4. ミゾ15



5. ミゾ15 炭化跡

6. ミゾ15



7. ミゾ15 (南東から)



P L. 21第二平坦面
遺構検出状況



1、ミゾ4、5（旧道側溝—南西から）



2、旧道跡（南西から）



3、旧道跡（北東から）



4、ミゾ7、8（北東から）



1、旧道跡先端部土坑、空堀跡（北西から）



5、第38号整穴（北東から）



2、旧道先端部土坑（南西から）



6、第38号整穴（南東から）



3、旧道先端部土坑（北西から）



7、第38号整穴土層堆積（南西から）

4、旧道先端部土坑・土層堆積



8、空堀A橋柱跡南西溝、土層堆積（北西から）





1、小柱穴内柱根



2、土壇土層堆積



3、柱穴内銅鏡出土狀況



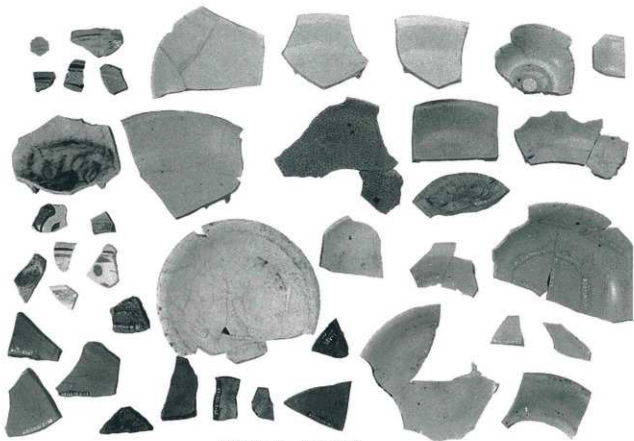
4、埋設炉鍋

6、空壕跡張芝工事



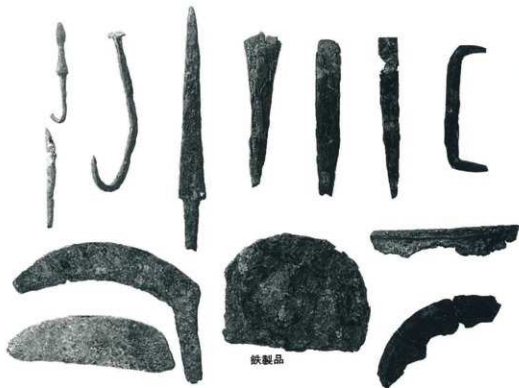
5、鹿角製駒出土狀況





陶磁器 (P.L. 7-1内面)

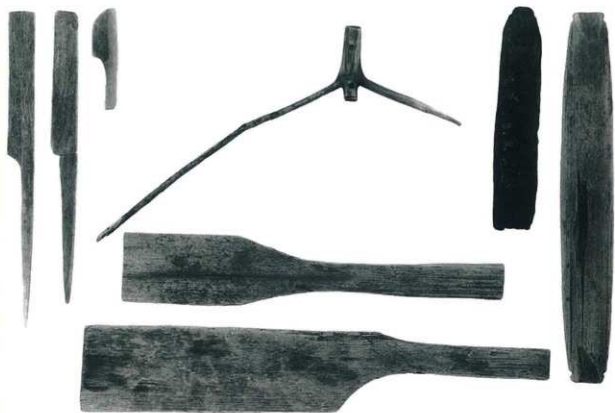
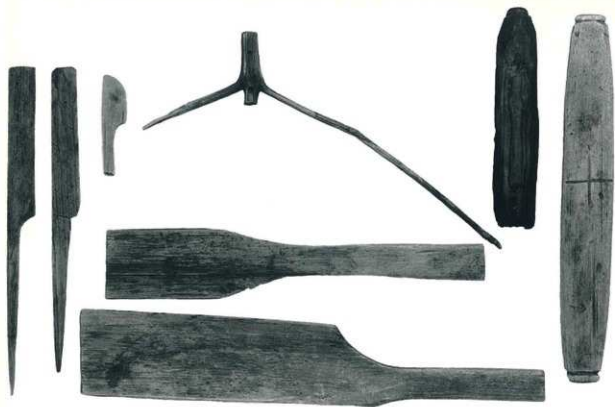
P.L.
24出土遺物

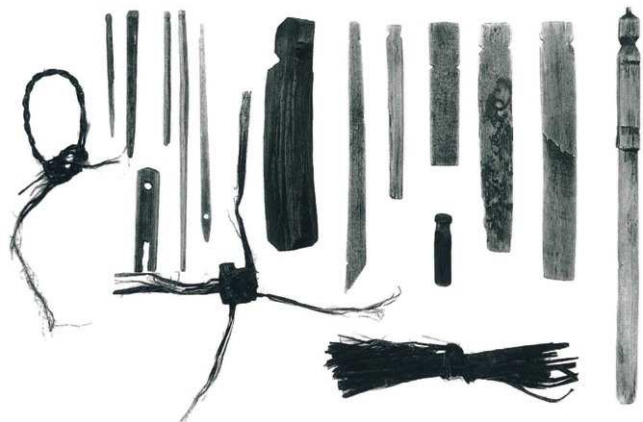
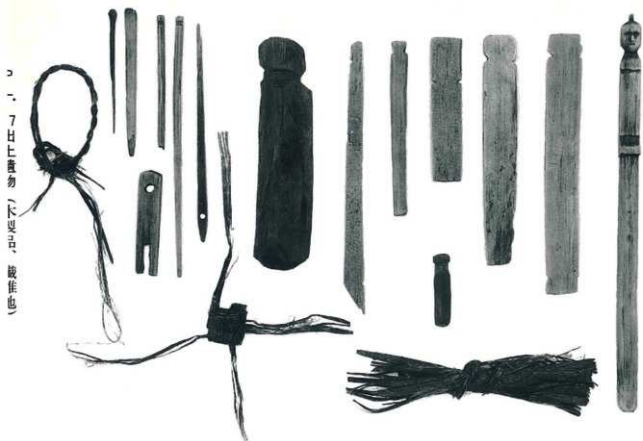


鉄製品

P.L. 25出土遺物(銅製品・るつぼ、木製品)

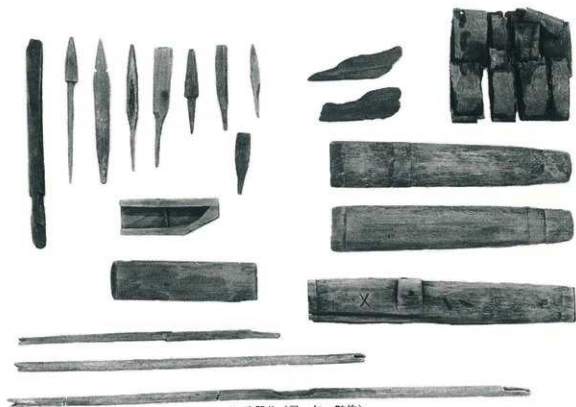




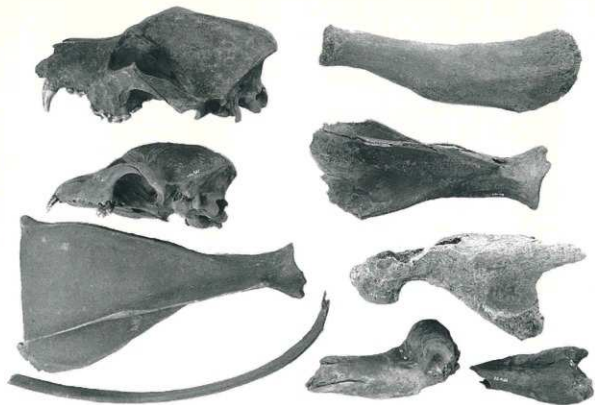




1、人形?部分



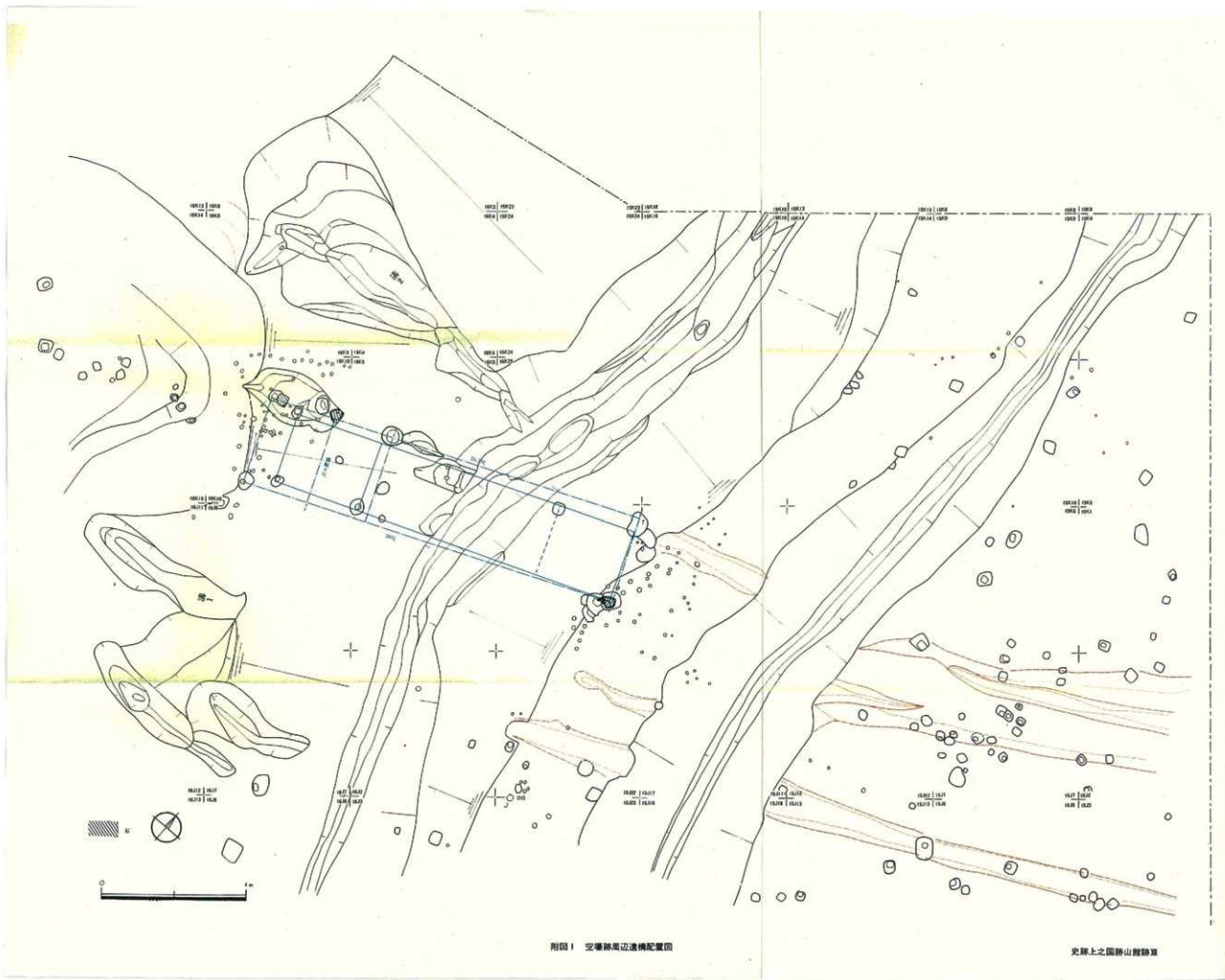
2、武器他(弓、矢、鞘他)

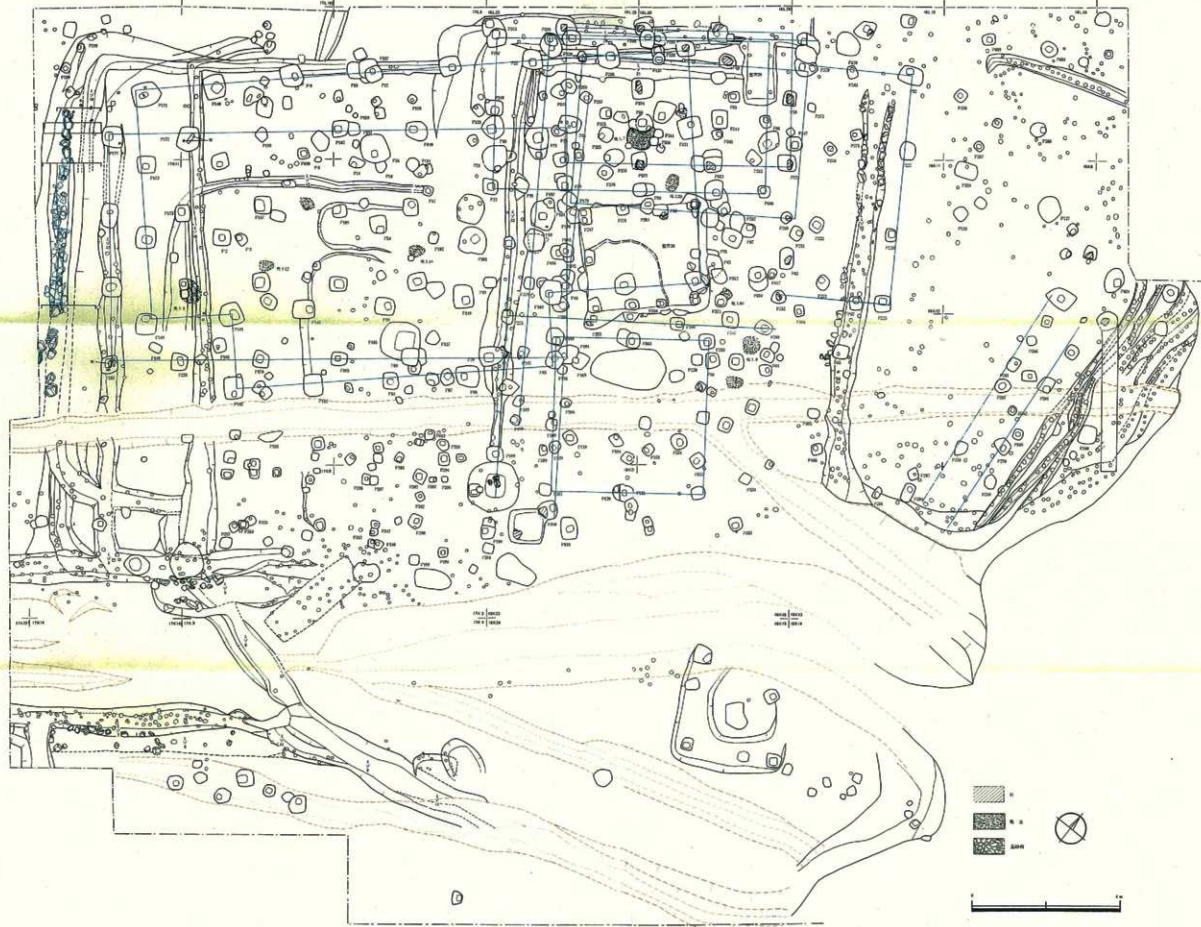


史跡 上之国勝山館跡 XII

—平成2年度発掘調査環境整備事業概報—

発行 上ノ国町教育委員会
北海道松山郡上ノ国町大留100
印刷 平成3年3月25日
発行 平成3年3月31日
印刷所 (協)高速印刷センター





附圖 2 第二平坊區遺構配置圖

史跡上之圓靜山館跡圖